白六ト打ケタル意ト白ホヲいニ打ツニ就テノ考

此註味アリ

白六は小目にいと打つてもよい、然し此の六の手がいに打つてあると、次に黒がろと掛つて來た時其をはと夾む事が出來ない、若し夾めば忽ち黒ににと掛られてほと後手を引いて守つて居らねばならぬからである、即ち六の時にいと打つのは次の黒ろを夾む手を自ら制限する手といふ事を心得ておかねばならぬ。

「註」白いに黒ろ白はに黒にの時白手抜すれば黒からほの點に掛けられ低地に壓迫されるの不利を見るは今更言ふ迄もない所である、即ち之を反面から見ると若し白が六の手をい　來たならば黒は直ちにろと右下隅に掛かつて來べきは確定の着手と言つておいてもよい、其て白六をいと打つても差閊ないといふのは『次て黒にろと掛かられても敢て之を夾攻める考はなく、他に着手する策戰の時に限る』と記憶しておかねばならぬ。

本圖の如く白六が高く星に打つてある以上は、黒は右下白二に對してろと掛る事は惡い（但一間高掛ならば可なり）何となれば掛れば直ちに白からはと夾まれる。

「註」今度は白六が一路高いため黒は（ニ）と打つても之に感じを與へる度が緩い即ち白を低く這はさうといふ樣な手が利かぬ、のみならず却つて白に（ホ）と尖みつけられ（八）と立つた時（へ）と煽られる例の酷しい手が殘つて居るから、黒は（ニ）の邊などへ手を下して居る樣な遑はないのである。

黒七ノ意

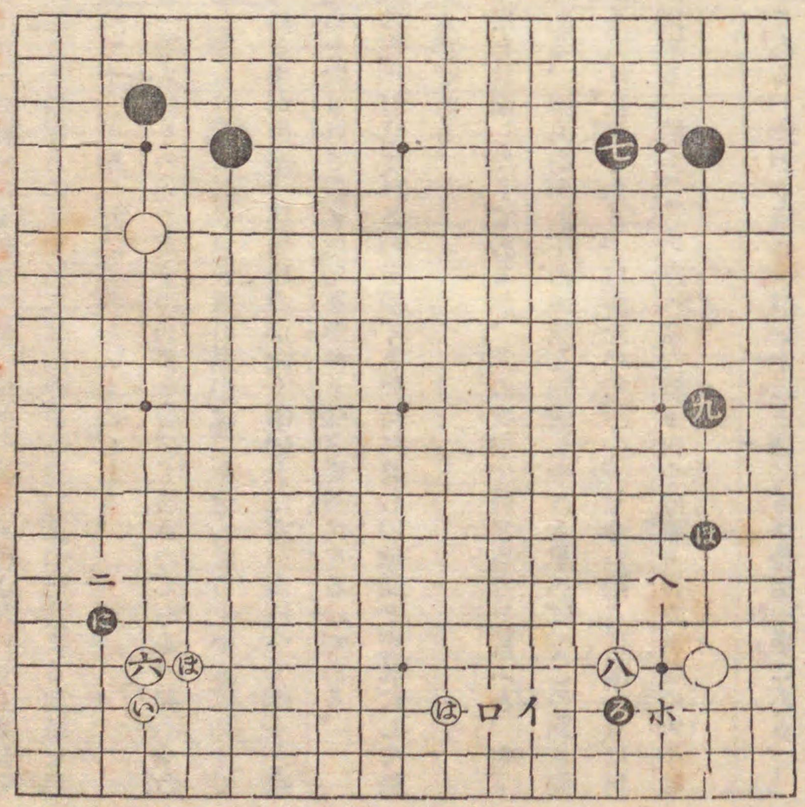
黒九ノ意

尙圖の如く白六が星にある場合、黒がろと右下隅へ掛つた時は、白は策戰次第てはの三間夾の外（ロ）の二間夾若くは（イ）の一間夾孰れなりとも任意の行動を開始してよいのである。

黒七は已に右下隅にろと掛つても白を攻める事は出來ず却つて黒自身が攻められる境遇に立たねばならぬ故、先づ自己の地域を守る最大場たる右上を此く高締りとしたのである。

白八も亦重要の點である。

黒九は右上一間高締りと相待つて側面發展の好位地て次て、はの邊に鋒を進めて己が地域を拓くと同時に右下隅の白に迫まらうといふ手である。



（布石法互先局）

白十二三種ノ意味アリ

黒十一ハ攻防ヲ兼ネタル手

白十二ハ敵地ヲ消ス手

白十は三種の意味を含んでをる、即ち第一は此の所を捨てゝおくと次で黒からいと拓かれ右下隅の我地は悪影響を受けるから先づ之の拓きを妨げるので、第二は此の手は白自身の確實なる地域を造る手になる、第三は右上の黒地へ向つて十三の點へ打込まうといふのである。

「註」 一見窄きに似たる此の十の一着も此くの如き重要の任務を帶びて居るのである、其から白が此の手を打たずして若し黒にはと來られると其は單に彼れ黒の地域を造らせるといふばかりでなく、次で黒にろ方面から迫まられる手が出來、黒の勢力が此くろと左右から迫つて來ると次には隅に打たれて右下隅の白は死命を制される樣な危殆な形勢を釀す動機になるのである。

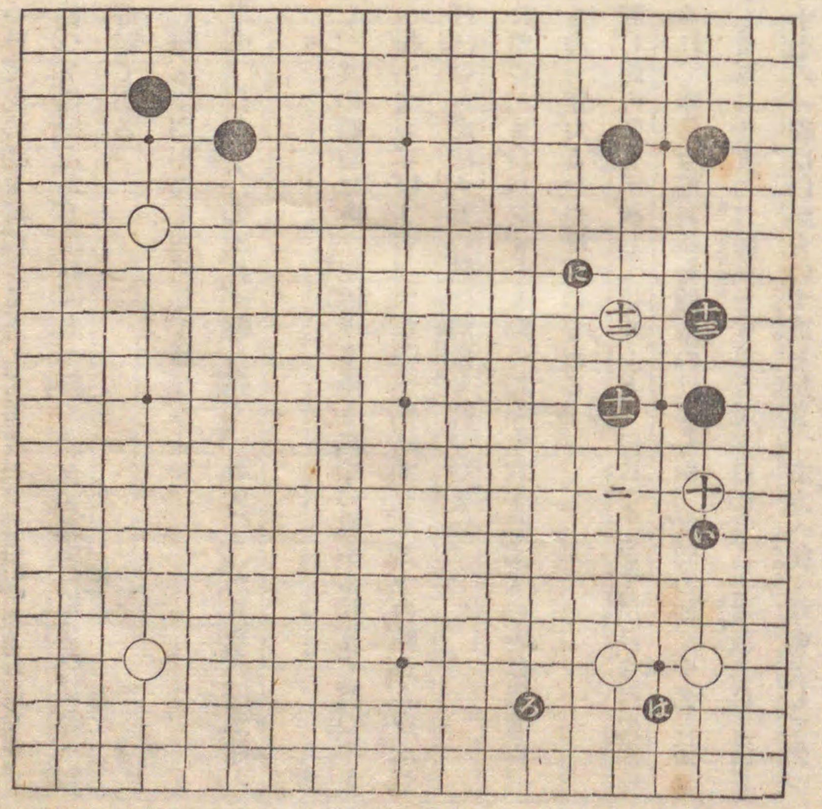
黒が十一と單關したのは、白に十三の點へ打込まれるのを拒ぐと同時に自らの地域を宏壯にして兼ねて右下隅の白地を侵略しやうといふ手である。

「註」 黒十一はヤハリ攻防の二作用を具備した手であるが、其の攻撃に屬する方を言ふと、右下の白の厚みを消さうといふ着手である、即ち白が右下の地域を防護しやうと思へば(ニ)の點に同じく單關せねばならぬ、然しながら其は後手である、白が此の(ニ)の飛をせぬ限りは黒からは何時でも(ニ)の點に鋒を進める事が出來る、黒が(ニ)の點へ來た限り白十の贏ち得た利益の大半は空に歸する譯である。

白十二は黒の地を消さうといふ着手である、此かる場合に黒が十三と應じるは普通の手である。

黒ニ一着ヲ加ヘテ治マル

「註」 白十二は單に此の一區域の黒地を侵害するといふのみでなく、種々の味を他日生ずる手である、或は上側黒の大地へ打込む伏線とも見る事が出來る、又局勢の進行上左下隅で征でも出來れば此の一子が如何程活躍するか判らぬ、又此の白十二がなければ黒はにの邊に一着を備へて此の大地は治まる所であるが、此の一子ある以上之に牽制されて容易に治りはつかぬ、又白から言へば已に低く彼の地の中へ十三と應じさせた以上はモ早此の一子を提られても惜しくはないといふ意味も生じて來る。



(布石法互先局)

白十四ハ要点

黒十五ハトカヽリ白ろノ時黒ハ二十ノ点ニ三間ニ拓クハ可ナリ又二十ノ点ヨリ夾ミ来ラハ

黒十七非常ニ大切ノ手

白十四は要點である、黒より先鞭をつけて此の邊を防備するとしてもヤハリ此の點より外はない。

「註」 此の十四の點は見合ふ點と言つて黒が左から迫れば右へ拓く若又右から迫まれば左へ拓く、何れにしても二間拓の出來る好點である。

黒十五は(ハ)より掛つてもよい、又單に(ろ)と下側中邊を占領して居てもよい。

「註」 此の(ろ)の點もヤハリ見合の點で、白が(ハ)と來れば(に)へ拓く、若又(ニ)から來れば悠然として(に)と拓く事の出來る點である。

黒十五は左方から(に)と掛つたと假定し、其の時白は(ろ)と單關する手と二十の點から挾んで打つ手とある、白が(ろ)と飛べば黒は二十の點へ拓いておけばよい、白が(ろ)へ飛ばずして二十の點から挾んで來たならば、黒は(十八の點)三々へ打込むか或は十五の點に兩掛を打つがよい。

是と同じく本圖黒の十五と掛つた時に當つても白は必ずしも圖の如く十六と飛ぶものとは限らぬ、或は(ろ)と下側星下から夾んで打つのも亦一策たるを失はぬのである。

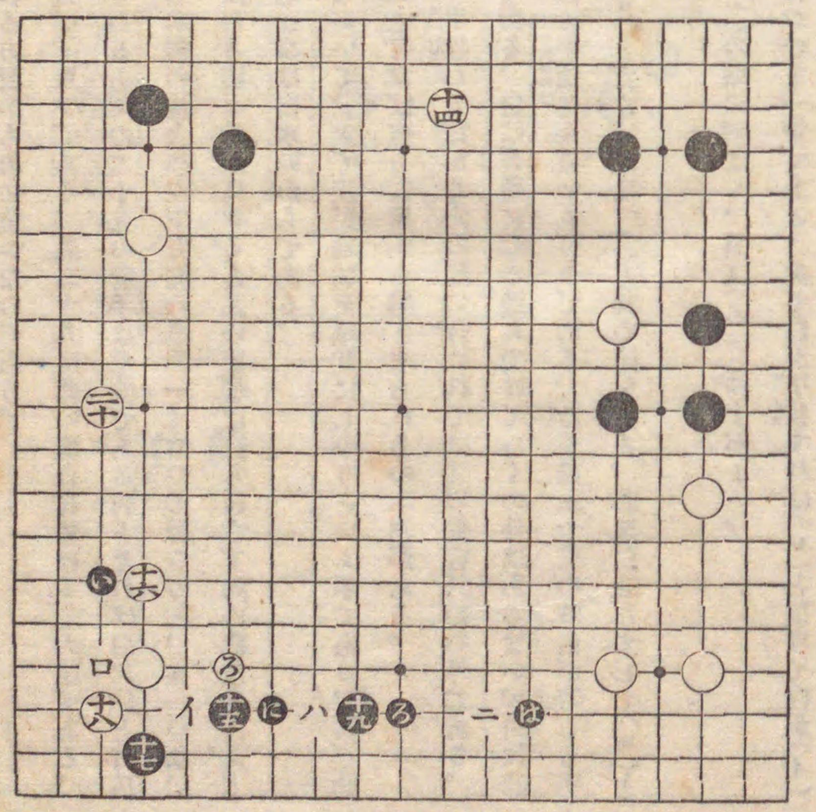
黒十七は非常に大切なる手である、若し此の所を手拔して捨おくと、白に(イ)と尖頂けられ黒(ろ)の點に立つた時白に(ろ)の點から攻立てられて非常な不利益を釀さねばならぬ、又圖の如く十九と拓く上から見ても此の十七の手を打たずして單に十九の二間拓をすると忽ち白に(イ)と尖頂られて同じく不利を招かねばならぬ、即ち此の十七の一着は白からの尖頂を拒ぎ、右方へ拓く準備として先づ

白十八重要ノ手

白の根據に迫り彼を削つて自ら益する手である。

白十八是亦重要な手で、此の手を打たずして單に二十の點に拓くと黒から此の點へ尖まれて少からぬ損害を招かねばならぬ。

「註」 白が十八の手を閑却すると兩重の不利を蒙らねばならぬ、即ち白十八の手で二十と打ち黒が十八の點に尖み、白(ロ)と應じたと假定すると、白は自分の地を削られた上に後手を引き、黒をして先手を以つて此の黒の活を完全ならしむるの不利がある。



(布石法互先局)

黒二九大場

黒三三ノ打ハ

黒三三ノ別手

黒二十一は先づ廣く地の造り得られる方面から白に迫つたのである。

白二十二以下二十八迄の相互の應接は約束手である、黒二十九は此の場合に於ける最大場である。

「註」下側左方の黒が若し薄弱であると此の二十九の着手は危險である何となれば白にいと打込まれる惧があるからである、然し本圖の場合は左下方面の黒が一寸治つて居るのと、モ一つは、若し白がいと打込み黒にると飛ばれる樣な結果になると其の影響は直ちに右下隅の我白地に及ぶ事になるから白は容易にいと打込む事は出來ぬからである。

白三十の一着は先づ敵の地を削つておいて、次て我が地域を厚壯にしやうといふ手である、若し此の三十の一手を打たずに單に三十二と打たば直ちに黒からはと來られるの不利がある。

黒三十一も亦手拔する事は出來ぬ、手拔して白から此の點に押されては其の損害計數の外である。

黒三十三は輕く敵地を侵略する手である、白は普通にの邊に受けておくの外はあるまい、白にと低く應じさすれば黒三十三の目的も半達せりといふ可きである、乃て黒三十三の時白が若しも手拔したらば黒は(イ)と打ち、白が(ロ)と立たば黒は(ハ)と其の頭を綽る、若又白立たずして(ニ)と這はゞ黒は(ロ)と押すがよい。

若又黒三十三の時白手拔せずして(ハ)の點に飛ばゝ、黒は(ホ)と押すがよい。

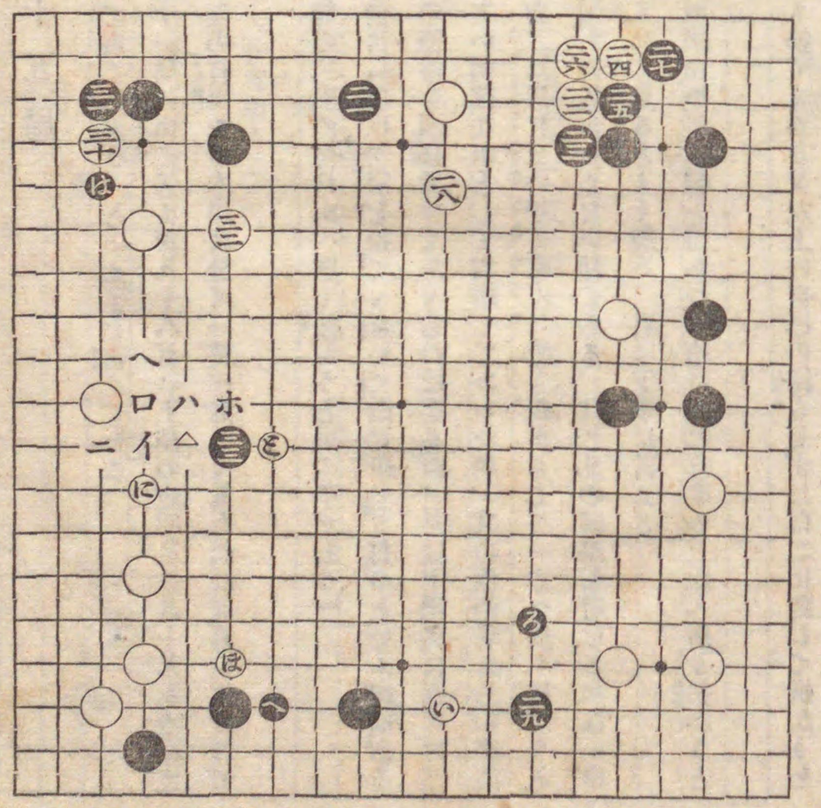
或は黒三十三の手を以つて(ホ)と打つのも一策である、次て白が手拔すれば(ロ)と頂けて白が(イ)

黒三三ヲ△ヨリ打ツハ如何

から綽れば(ヘ)と行び、(ヘ)から綽れは(イ)と行るがよい。又白手拔せず△印へ來れば三十三の點へ押しておく、若又(ハ)と頂けて來れば△印へ綽ねておくがよい。

□問、黒三十三を一路低く△印に打つたならば如何です。

○答、深く敵地に入るは危險である、若し黒が三十三の手を△印邊へ深く來ると白は先づ一着ほの邊に頂け黒をへと行ばして置いてとの邊から冠に壓して攻めるといふ手が出來るかも知れぬ。



(布石法互先局)

黒ハ明隅ヲステ、他ニカヽリ打ツイハアルヘカラス

互先第二十五局

（本圖）白二は後に右側(い)方面に向つて廣く拓かう、といふ手を含んでをる。

「註」　此の黒一白二の形は已に第十一局に出て居て第八十八頁の上欄の説明及第八十九頁の圖によつて明了な筈である、が其と同型の打出たる本局に於て一言注意して置かねばならぬのは外てもない、第十一局説明の第一行に

『白二は黒に(は)と掛からして(にほへ)の三點の何れかへ廣く拓かうといふ手である』

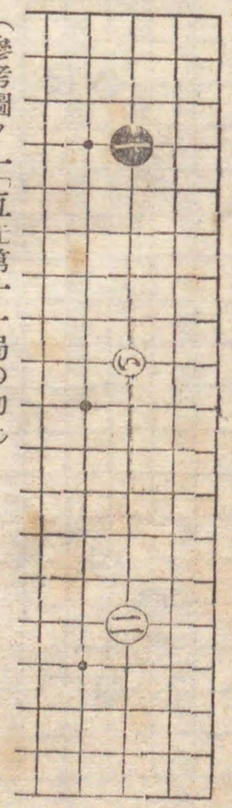
と説明してある、此の説明を讀む前に『黒は明隅を捨てゝおいて敵に掛つて打つといふ事はある可からざる事である』といふ既定の條件を頭に置いてかゝらねばならぬ。是は本講義に既に再三再四説いた所であるから言ふ迄もない明確な事として省略しておいた所、其の後讀者からの來問に徴すると、彼の説明を以つて『白二は黒に三の手で直ぐに(は)と掛からして一方へ廣く拓かうといふ手である』と説いたものと誤解した人が少くない樣である、其で此の誤解を避けるには『白二は』の次に他日といふ二字を挿入して見るとよく解る、更に丁寧に言ふと

『白二は他日右上隅に(い)の高締の出來た後黒が(は)と掛かつて來れば(にほへ)の三點へ廣く拓かうといふ意を含んでをる』

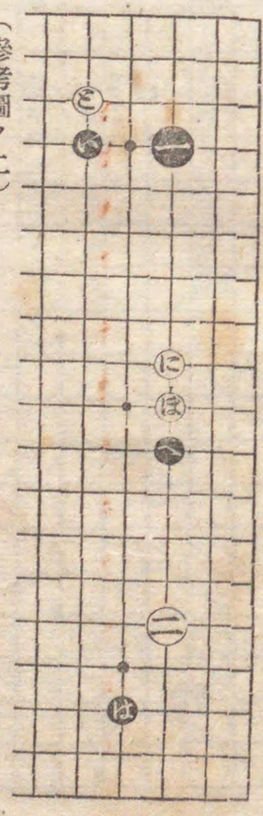
といふ事になる、乃ち他の明隅をも捨てゝおき又左上の自己の締もせずに白二に對して掛かりを

打つといふ事は不道理な着手である、其の故は茲に「參考圖ノ二」を以て示す通り黒一白二の次黒が三の手で直ちに白二に掛つたならば、白は黒一に對して四と掛かる其の時黒が右上を(ろ)と尖めば白に(る)と廣く拓かれる、若又白二を(は)と夾めば忽ち白に(ろ)の點へ掛けられて低地を這はされる何れにしても愚を見る譯で、之によつて見るも黒が直に三と掛かる手のない事も明了、隨つて白二の意が直に黒に掛からしてといふのでない事も自ら明になるであらう。

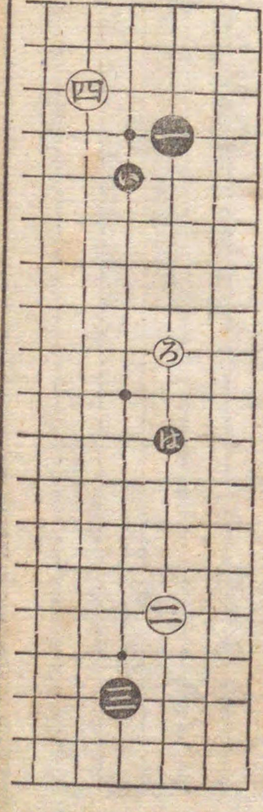
（本圖）



（參考圖ノ一「互先第十一局の初」）



（參考圖ノ二）

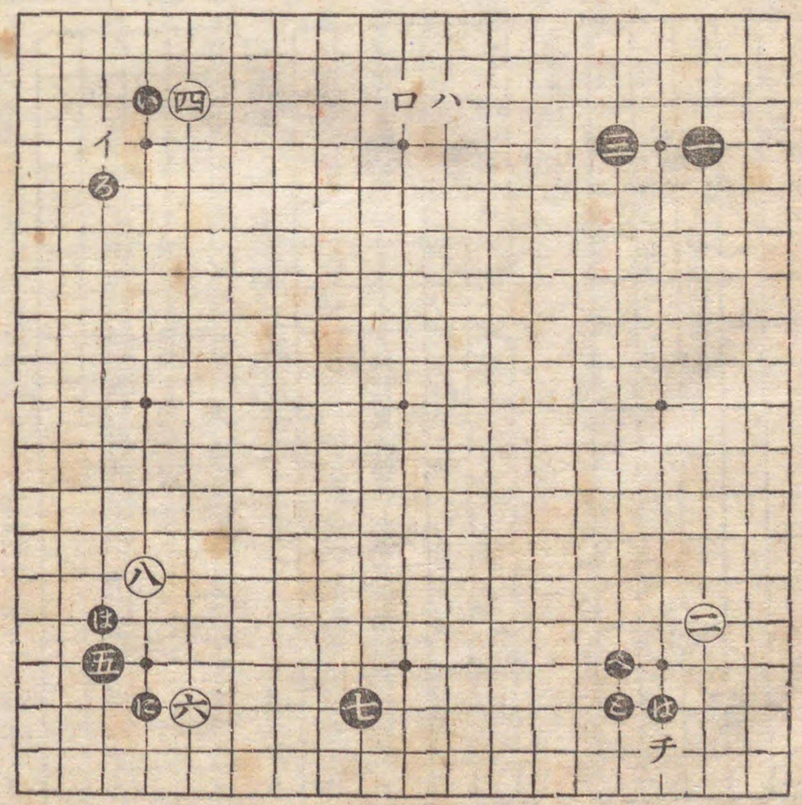


黒三は㋩と小目若くは㋣と目外に打つてもよい、但しさう打てば右下隅へ㋥と掛かる手とは何等の連鎖を持たぬ事になる。

白四を此く目外に打つたのは、若し黒が(イ)と低く掛からば(ロ)(ハ)の二點の何れかへ廣く拓かうといふ考てある。

黒五は普通の手てある、が然し此の一點とのみは限らぬ、或は㋭或は六の點或は㋥の何れてもよい。

黒五に對する白六の手は此より外にはない、若し他へ打てば黒に兩締をされるからてある。



黒七ノ意

白八ノ意

三角ニ交マレタ時ノ凌手土種

黒七は後に右下へ㋬と高掛を打たうといふ意を含んて此く三間に夾んだのてある。

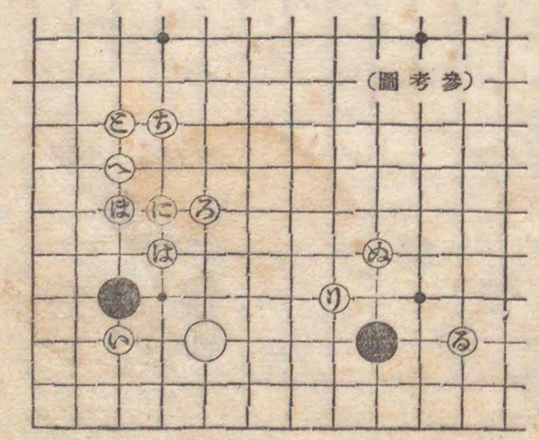
「註」 尙手順は違ふが『互先第二十三局』説明第百六十二頁第四行目の「或は黒五の手て」以下三行及註の四行と同轍の策戰てあるから參照せらる可し。

尙黒七は次て白が(イ)と左上を締らば直に㋬と打ち白が㋥の點黒㋭白(チ)の應接を遂げておいて㋭と尖頂けやう、若又白が左上を締らず右下隅を㋥の點に締らば黒は直ちに㋭と尖頂けて急に迫まらうといふ二通りの策を考へて居るのてある。

白八の大斜走掛けは、此の黒より㋭と尖頂けられる手を凌いだのてある。

白は黒から尖頂けられる手を凌ぐに此の大斜走より外の手はイケヌかと言うと、決してさうてはない、他の何れの着手を擇ばうとも其は白の任意てある。

「註」 三間夾に於ける此の形の時白の凌手は十一通りある、其は(い)の三々頂㋣の二間飛㋩の斜走掛にの大斜走掛㋭の一間夾返し(へ)の二間夾返し(と)の三間夾返し(ち)の三間高夾㋬の肩㋬の冠㋣の夾。是てある詳細は定石の部を參照せらる可し。



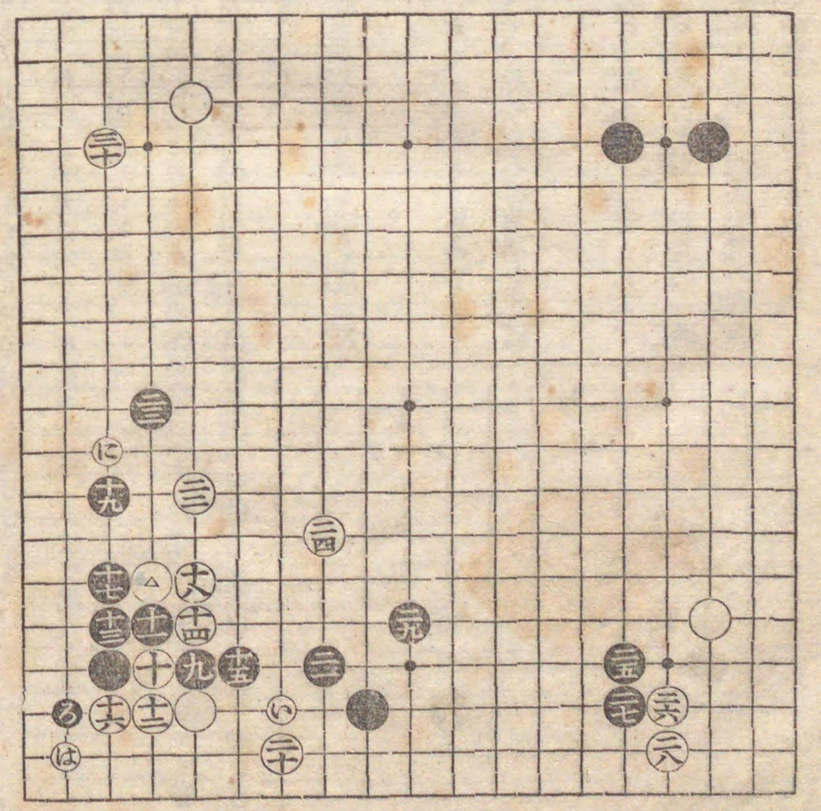
十以下二十四迄尋常ノ應接

大不利

黑は九の手を十一の點若くは十七の點に頂ける手もあるが先づ本圖の通り打つが普通である。白十以下二十四迄は尋常の應接である。

□問、黑十三の手で十四の點を粘いておかば其の結果如何なりますか。

○答、本圖の樣な場合は十三の手で十四の點に粘ぐのは大不利益である、其の故は次頁『參考圖』の樣な結果となつて、當初に夾んだ七の一子が、全く無勢力の狀態になるからである。



注意スベシ十三ノ手デ十四ノ点ヲツギテ可ナル場合

二十ノ手二種

征関係トハ如何

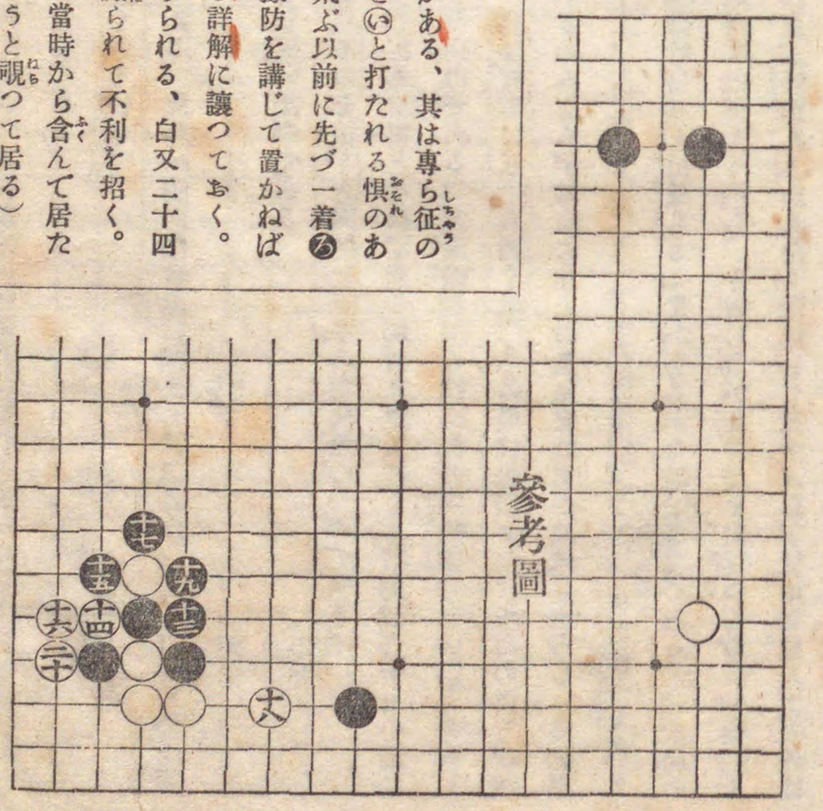
黑二十三、白二十四ヲ得タリ

「註」黑が十三の手で十四の點に粘ぐのは右上方面に白の布石が無くて白△印の一子を征に提り得らるゝ場合であると共に、七と三間夾のない時である、といふ事を記憶しておかねばならぬ。

尙本圖白二十の手でいと打つ事がある、其は專ら征の關係によるので、白に二十の手をいと打たれる惧のある時は、黑は初に溯つて十九と飛ぶ以前に先づ一着ると綽ね白にはと抑へさせて之が豫防を講じて置かねばならぬ、其の詳細は大斜掛定石の詳解に讓つておく。

黑二十三を手拔すれば白ににと頂けられる、白又二十四の手を閑却すると黑に此の點から煽られて不利を招く。

黑二十五の高掛は既に七と着手する當時から含んで居た手である（手が緩めば何時でも行かうと覗つて居る）



參考圖

いゝ攻撃点

白三十 大場

良着

白三十六 苦手

黒三十七ハ普通ハ無理

黒二十九は白に㋙の邊へ迫られる防備を兼ねて暗に左方五子の白に感じを與へて居る。

白三十の締は此の場合に於ける最も大場である。

黒三十一は一路控へて㋝と打つておくのも佳い。

白三十二是亦大利を保有する良着である、此の一着が無ければ黒からは急に左上隅に迫つて㋟と頂ける様な策もある。

黒三十三は先手を以つて㋛の頂越しを拒いだのである。

黒三十五は白からほと出路を閉塞されるのを拒くと同時に五子の白に迫つたのである。

白三十六の一着は實に苦心慘憺の手である、何となれば此の所白は能ふ可くんば先づ三十七の點に尖んでおいて然る後に三十六へ拓きたいのである、が遺憾ながら玆は白の獨擅場でないから今若し白が三十七への尖を先きにすれば、黒は直ちに三十六若くは(イ)の邊に先鞭をつけて白の謀を破壞する手段に出て、白の計劃は阻齬するのみならず却つて左上の黒に宏壯なる地域を造らしむる結果となる、乃て止むなく白は、先づ三十六と地歩を占めて三十七方面は黒の來るに一任したのである。

黒三十七は普通の場合ならば白に㋩黒㋚白㋞と出截らるゝ患があるから無理な着であるが、本局の形勢では左方に未だ整はぬ五子の孤弱な白があるから、今若し白が此の所を出截つて紛爭を生じると、忽ち其の影響が左方五子の白に及ぶ惧があるから白も隱忍して三十八以下低地を這ふより外は

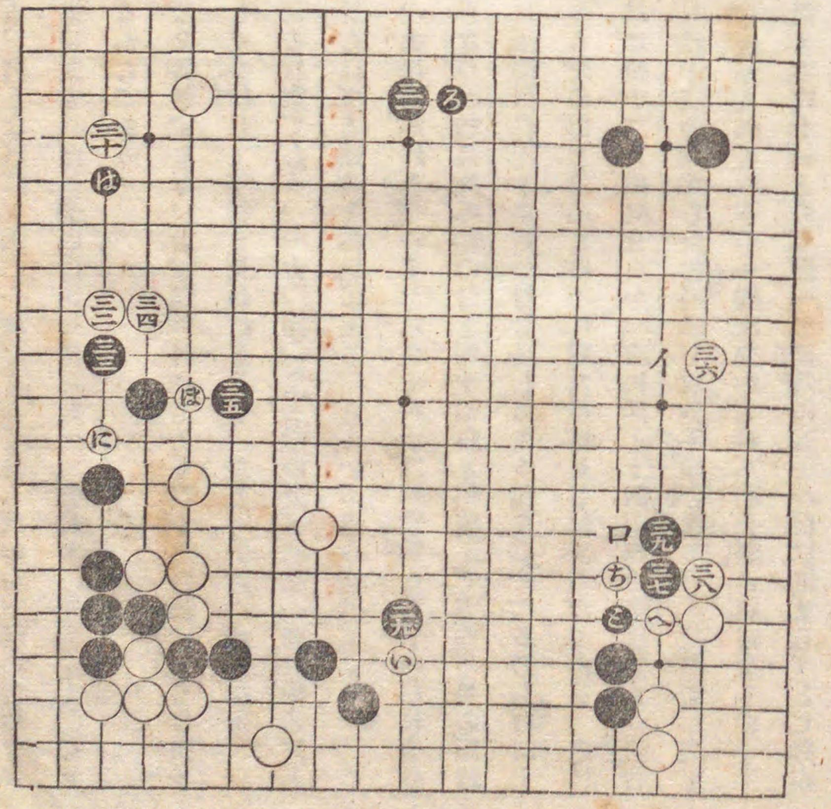
ないのである。

隨つて黒三十七も亦臨機の好着點を擇んだ譯になる。

□問、黒三十七の手を(ロ)と二間飛したならば如何ですか。

□答、其は緩慢の嫌がある、矢張り酷しく三十七と迫るに越した事はない。

「註」 普通の場合で三十六方面に白がある時は黒は三十七の手を(ロ)に二間し、廣く拓いて居る白の地を低くからしめると云ふ趣向もあるが、本圖の場合は白より㋩、㋞、と出截らるゝ恐のない處であるから烈しく此所へ迫るがよいのである。



(布石法互先局)

白四十意味深長

如斯所ヲ玩味スベキナリ

白四十の曲りは意味深長の着手である、何となれば、此の一着によりて自ら此の右下隅の白地を安固にし同時に下側の黒地を侵略して遙に左方△印五子の白に聲援を與へ、兼ねて□印(三十六)孤立の白の窮境に陷るを救ふの良着てあるからてある。

「註」 白が四十と曲る手の前の局面を通觀すると、右下隅の白は黒より四十四の點に曲られ四十の點に押へらるゝ事に由つて太だしく萎縮して不利を見ねばならず、左方五子の△印白は未だ一眼の備もなくして黒の勢力圏内に在る狀態である、一方□印(三十六)の白は右上一間高締の黒と右下△印(三十九)の黒の鋒の下に計られざる運命を抱いてをる、ともいふ可き現狀である。

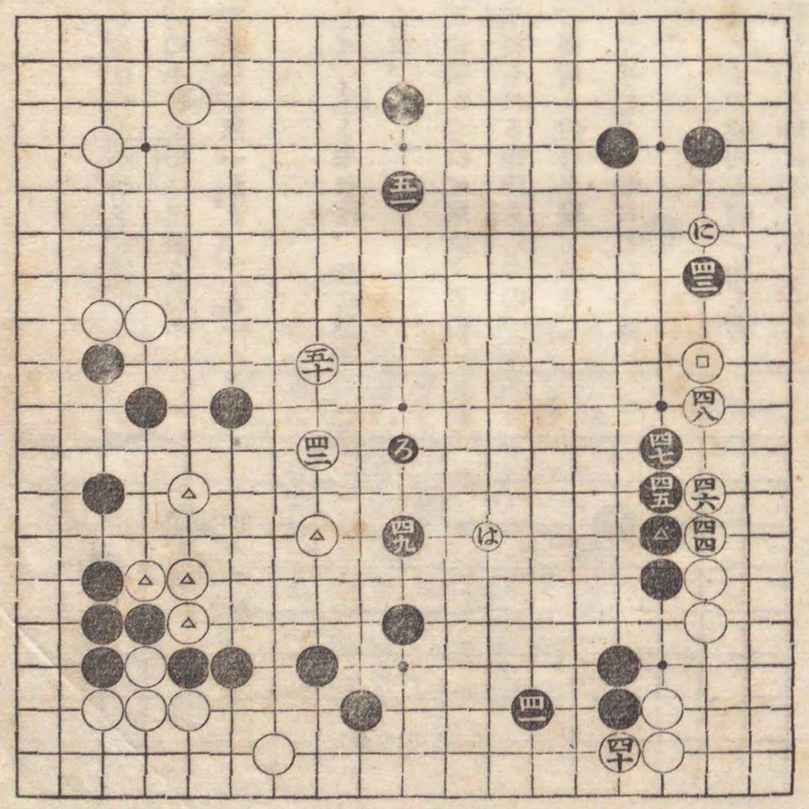
今白四十の一子の効果を詳述せんに、次に黒が四十一の手を以つて四十二の點から五子の白に迫つたと假定し、其時白四十九黒ろ白はとなつた結果此のはの白と四十の白と相望んで下側の黒の領域は蹂躙され、一歩を誤れば黒は左右に兩斷されんとするの勢を呈して來る樣な事になる乃ち白四十の曲の一手によりて黒は四十二方面から此の白を攻めるの不可能たる結果を呈するのてある、之に反し白若し四十の曲りを打たずして單に四十二と逸出せんか、次に黒より四十四の點に曲られ白若し不利を避けて四十へ曲らば黒は忽ち四十三の點から白の一子を攻る手順となる可く、白若し之を患ひてにと二間拓せば黒に四十の點に押へられて右下の一隅は少からぬ不利を釀さねばならぬ。

乃て白が此く四十と曲つたに對して黒も亦四十一と自ら備へて徐ろに五子の白に迫まらうとし白亦

四十二と活路に就いたのて。

此くなつては黒が四十四と曲つても白に悠然としてにに拓かれる故、黒は先づ右上の自己の地域に厚壯を加へて四十三と迫り四十四以下四十八迄低く白を連絡せしめたのてある。

黒四十九の手て假に五十方面より攻めてみるも大利を得る見込なく却つて我地域を荒されるの外ない故先づ自己の地域を擴めつゝ彼に迫つたのてある、黒五十一は我大地域を守る最良の點てあると同時に暗に中央七子の白に多少の感じを與へて居る。



(布石法互先局)

黒一ニ対シ白直ニ二間高ニ掛リタル打方白二ノ意

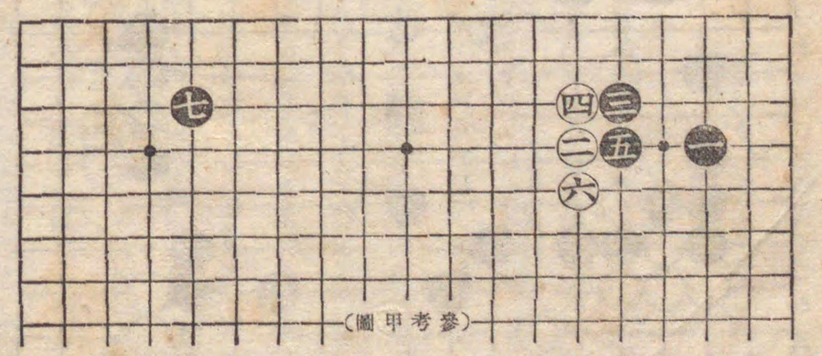
互先第二十六局

黒一に對して白が二と二間高掛に打つのは(い)と小斜走に掛かるのと主意に於ては大差はない、乃ち(い)の小斜走掛は黒からの小斜走締を奪つたのであるが、此の二間高掛は黒一から(イ)と一間高締するのを妨げた手である。

「註」 此の所若し黒が白二に接觸して(イ)と來れば、白に(い)の點に綽ねられ不利を招かねばならぬ。

黒三の應手は（置棋の時に白に二間高に掛かられて單關するのと同意）普通の着手で、白から(ろ)と頂けられる豫防をしたのである、然し黒が三と後手を引いて他の要所へ白に先鞭をつけられるのを嫌らはゞ先づ『參考甲圖』に示す樣な手順に打つて第七の手を以つて隣隅へ着手するがよい。

「註」 是は前々局第百七十九頁黒五ノ手の説明と同一轍である、黒が他隅へ轉じるのは、單に轉じると白に(ろ)と頂けられ



（參考甲圖）

黒單ニ他ニ転シ白ニろト頂レテハ不利

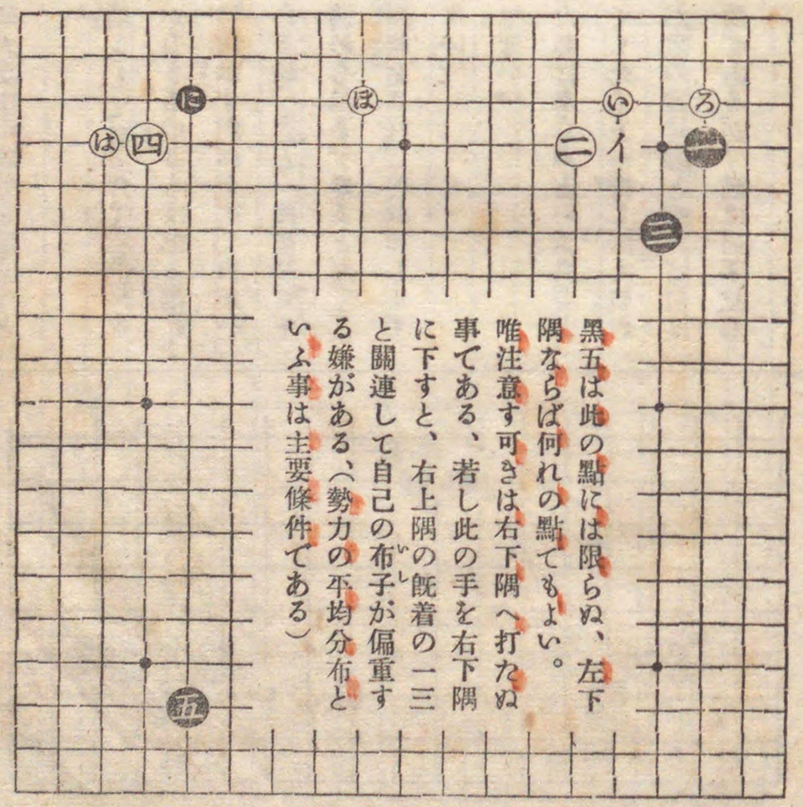
黒五ヲ右下隅ニ打タヌ

勢力ノ平均分布ハ必要条件

ては其の變化如何なつても黒の不利である、然し場合によりて手拔せぬとは言へぬ、手拔して白に(ろ)と頂けられた後の變化の詳細は定石の部に讓る事とする。

白四を此く星に打つには主として二の一子との均衡から打着したのであるが、或は此の手を以つて(は)と小目に打つ手が無いでもない。

「註」 白四を(は)の小目に打つたと假定して後に黒が(に)と掛つて來れば、白は(ほ)と三間に夾む手順になる。



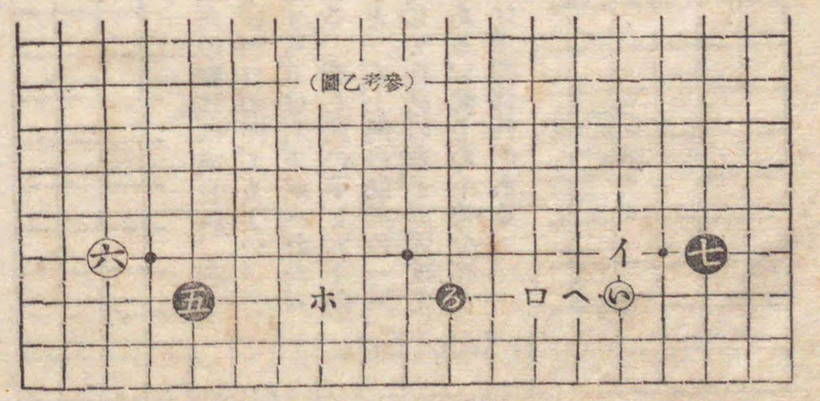
黒五は此の點には限らぬ、左下隅ならば何れの點でもよい。唯注意す可きは右下隅へ打たぬ事である、若し此の手を右下隅に下すと、右上隅の既着の一三と關連して自己の布子が偏重する嫌がある、（勢力の平均分布といふ事は主要條件である）

白六は左上星の一子と相待つて左側に大規模の地形を造らうとする策である。

「註」 此の場合に於ける白の掛場所としては是より外はない、萬一小目（七の點）にても掛からうものならば忽ち黑に㋺と同姿勢に導かれて『參考乙圖』に示すが如く次で白が㋑と掛かれば㋺と夾まれるの不利がある故（イ）と一間高にでも掛るか、其でも尙（ロ）と一バイに詰められる、さりとて（ホ）と夾を打てば黑に右下を（ヘ）と大斜締をされ、何れにしても不利の結果に陷るより外致し方はない。

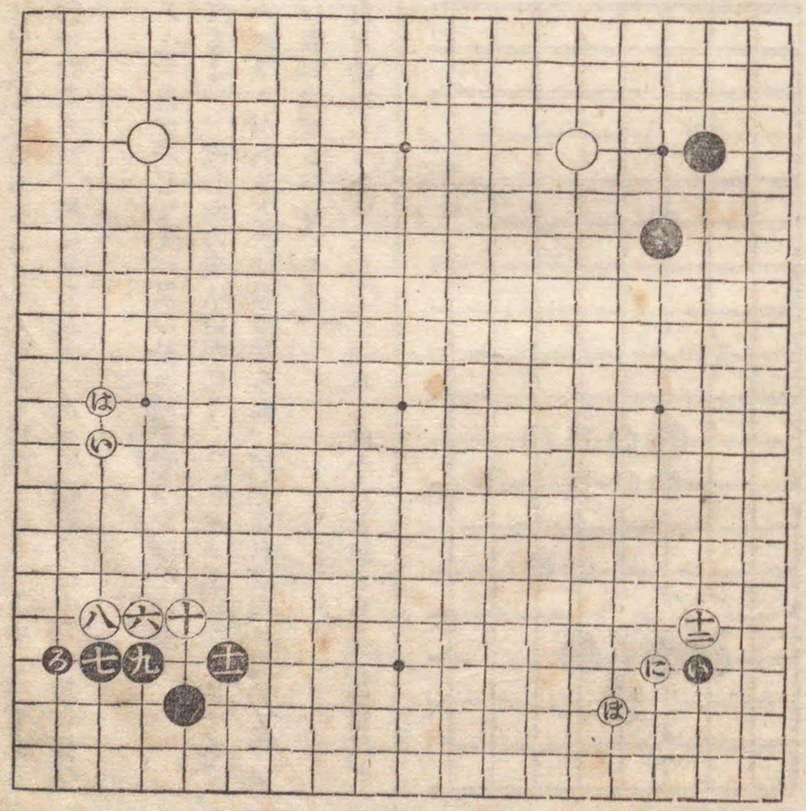
黑九は㋺と下る普通の着手でも差閊はない。

「註」 黑は此の場合九と沿うて打たねばならぬといふ必要から此く打つた譯ではない㋺と下つても此く上へ押しても孰れでも可いのである、若し黑九の手が常の樣に㋺と來れば白は尋常は三間㋩か四間㋭かに備へる所であるが、茲は白手拔して十二の點に打つかも知れぬ。



黑が九と押す主意は十と白に行びられた調子を以つて十一の尖を打たうといふのである、此の十一の尖が出來れば下側中邊への黑の勢力は優秀である、其の代り㋺の下りがないだけ左側の白も亦利益を保有して居る譯である。要するに一得一失は免れぬ所である。

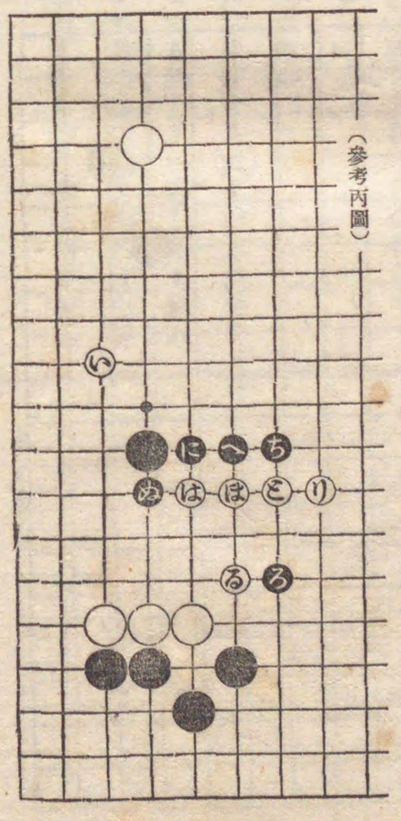
白十二は或は星に㋩と打つもよい、又㋭と目外に打つても差閊はない、孰れにしても黑は十三の手で高目に掛るのである、此は隣隅黑自己の布石との關係に由るのである。



黒十七は左下三子の白を攻めて左側に白の將に造らんとする大模樣を蹂躙しやう、といふ手であるから、若も此の時白が直に三子から動いたならば、黒は忽ち左上へ掛つてい若くは十八の點に打つ手順になる。

乃て白は黒にぬ等と打たさぬため十八と大斜に應じて先づ黒の發展地を奪つたのである。

「註」黒十七は一路低くろと打つてもよい、然し此の所は白が低く(イ)と來る患のない所であるから白も亦黒十七の謀の裏をカイて十八と打つたのて、然らば黒は十七の手て先づると掛つたならば如何か、といふに其時は白にはと三間夾の逆襲をされる故左樣は打てぬ、此く兩者互に策戰の秘術を藏しての一進一退實に趣味津々たるものてある。

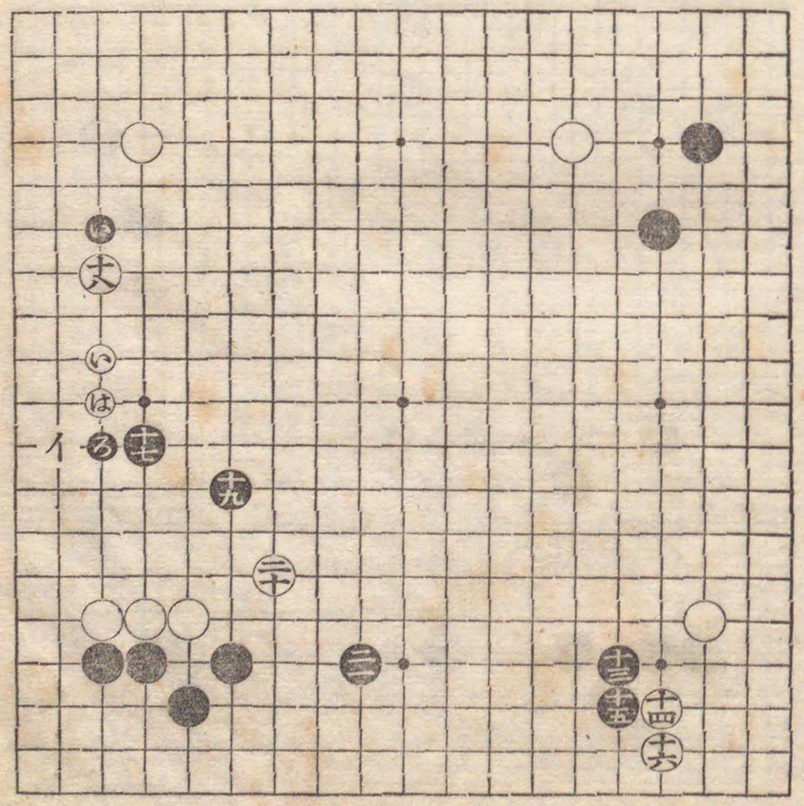


(參考丙圖)

□問、白十八を躍進していの邊に迫つたならば、其の結果如何に變化するか。

○答、すると黒に二十の點から迫られ『參考丙圖』符號順の樣な結果となり、い(十八)の一子が此の黒の堅壁に接するの危險を釀す事になるから甚だ面白くない、其て此く控へて大斜走したのてある。

黒十九は三子の白を二十と動かして二十一の手を迫り出し、自然の手順を以つて自己の防備を加へつゝ白を攻め立てる巧妙な手段てある。

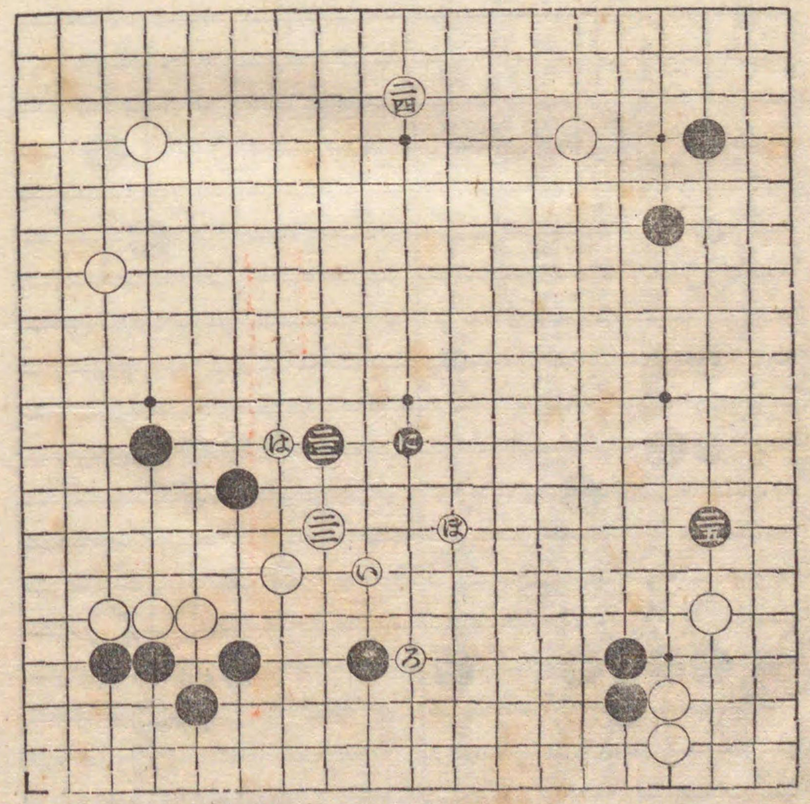


黑三五要点

白二十二の手ていと單關するのと此く尖むのと二通りの打方がある、いと飛ぶのは次て下側へ向つてろと頂けやうといふ手である、本圖の尖は、はの斜走掛けを覗つて居るのである。

乃て白が若しいと飛べば黑は手抜して上側二十四の點に打つのであるが、此く尖まれては手抜も出來ぬ故、二十三と打つてはの掛けを防いだのである。

黑二十五は要點である、或は先づにと迫り白にほと二間に應ぜしめてから二十五と打つも敢ておそくはない。



白二の策ノ手

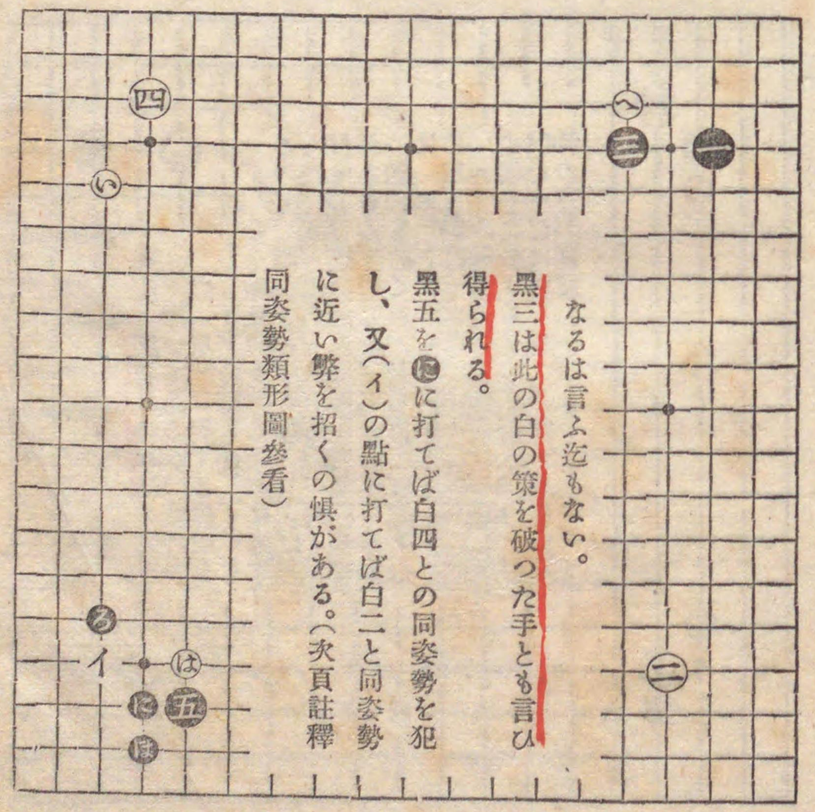
第貳拾七局

白が二の手を此く星に打つたのは些か策の存する手で、其は黑に四の點に打たせ、白はいと掛かり、黑にろと左下隅目外に打たせて、白は高くはと掛かり、黑に、白五、黑はの手順を經て、白は茲に先手を取つて右上隅にへと掛からうといふ策である。

△註　黑一、白二、黑四、白い、黑ろ、白は、黑に、白五、黑は、白へと打つ手順が、何故白の注文であるかと言ふと、此くの如き手順に運び得たならば、右下一隅は當分白の獨占て、他の三隅は白が孰れも掛りを打ち、黑の獨占を妨げて居る形である、即ち白の有利なるは言ふ迄もない。

黑三は此の白の策を破つた手とも言ひ得られる。

黑五をに打てば白四との同姿勢を犯し、又(イ)の點に打てば白二と同姿勢に近い弊を招くの惧がある。(次頁註釋同姿勢類形圖參看)

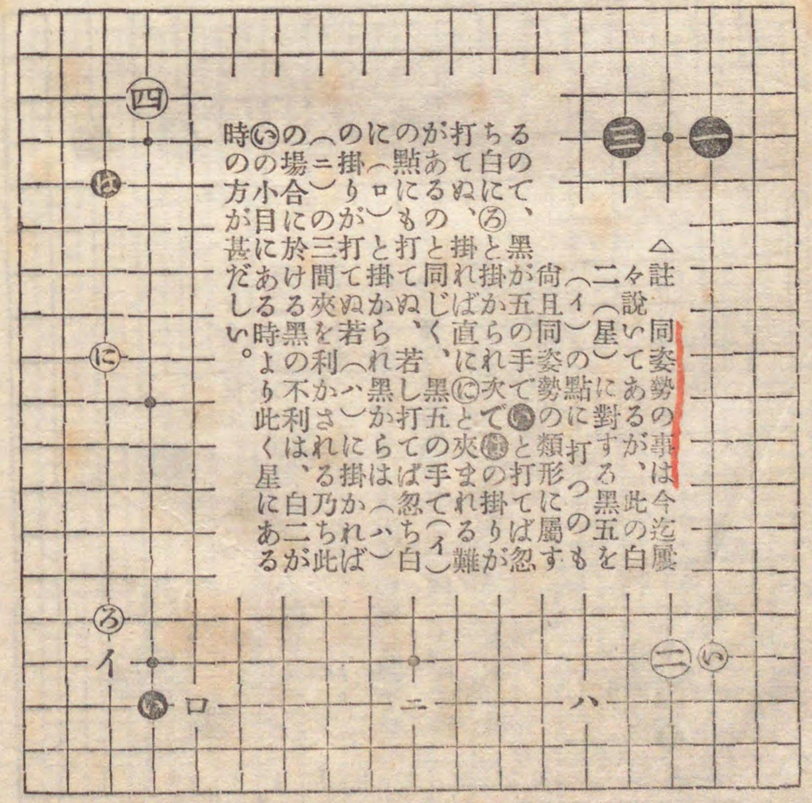


(布石結五先局)

下段同姿勢ノ撃ヲ解ク

△【參考假定圖】（前說繼續）白二の意中を忖るに略前述の如しとすれば即ち以下記す『參考假定圖』の樣な形になる乃ち此の形に於ては、白が第十の手で右上にちと掛かつた次に、黑からりと下側に打つたとしても白は悠然として右下よりぬと大斜走しておけばよい、若又黑がりと來ず、右下白二に掛つて（イ）と打たば白は之を三間夾にして下側星下に（ロ）と打つ手順になる、即ち何れにしても白二が小目（ハ）の點にあるよりは此く星にある方が打ち易い。

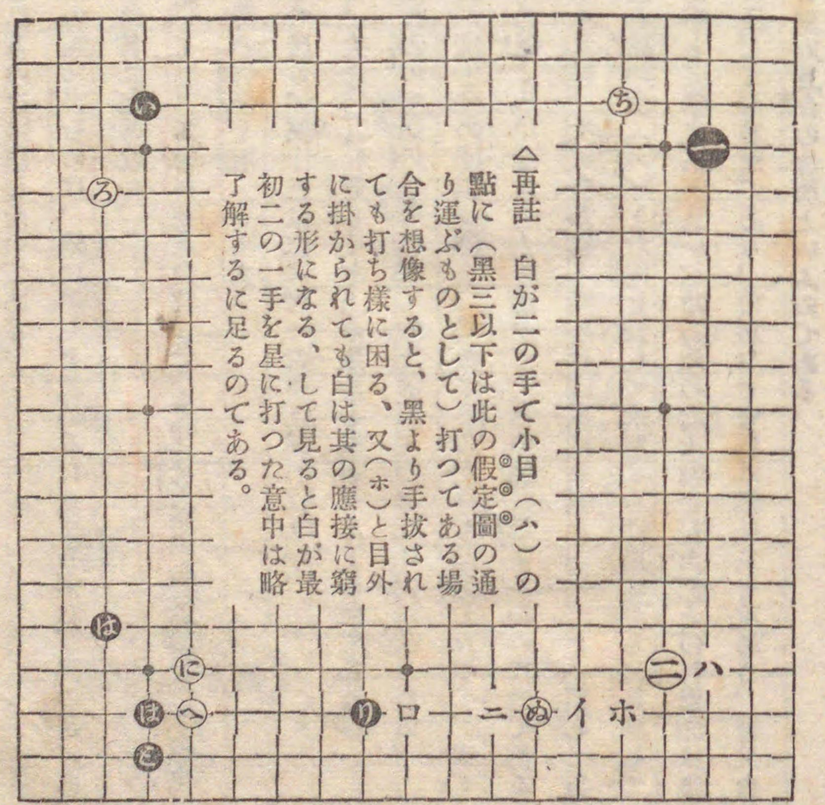
（同姿勢類形參考圖）



△註　同姿勢の事は今迄屢々說いてあるが、此の白二（星）に對する黑五を尙且（イ）の點に打つのも同姿勢の類形に屬するので、黑が五の手で（ロ）と打てば忽ち白に（ろ）と掛かられ次で（ハ）の掛りが直に（に）と夾まれる難點があるのと同じく、黑五の手で（イ）に掛れば（ロ）と掛かられ（ハ）に掛かれば白は忽ち打てぬ、若し打てば忽ち白の時（い）の場合に於ける黑の不利は、白二が此く星にある時より此く星の小目にある方が甚だしい。

△註　初白が若し二の手を小目（ハ）の點に打つて居る時に、此の假定圖の樣な風に運んだものとすると黑が十一の手を以つてりと來た時、白が右下（ハ）の點から（イ）の點に大斜走締りをして見ても、黑からは悠々として（ニ）の點に二間拓される、且つ亦黑はりと打つ手で、右下小目の白（ハ）に掛つて高目、目外若くは大斜走の諸點からいろ〳〵打たれる惧もある。

（參考假定圖）



△再註　白が二の手で小目（ハ）の點に（黑三以下は此の假定圖の通り運ぶものとして）打つてある場合を想像すると、黑より手拔されても打ち樣に困る、又（ホ）と目外に掛かられても白は其の應接に窮する形になる、して見ると白が最初二の一手を星に打つた意中は略了解するに足るのである。

黒九此場合大場

白十八ノ筈普通ニ非ス

黒七は白より二間若くは三間に夾まれるのを豫防したのである。

△註　白が黒五の一子をいに若くは七の點に夾むのは、單に黒五を攻めるに止まらず右下隅の星にある白二の位置より見ても好拓たるは言ふ迄もない。

黒九は右上一、三の拓として大塲の利を占め、同時に左上白四、八からの拓を制限した好着點である。

黒十一は右上の我が地域を擴めつゝろの打込を覗ふ手である。

白十二はろの點への打込をも意味して居る、黒十三は之に備へた手と見ればよい。

白十四は黒ろの打込の防備を兼ねて、次に(ハ)に冠して右上の黒地を侵略せんとの意である。

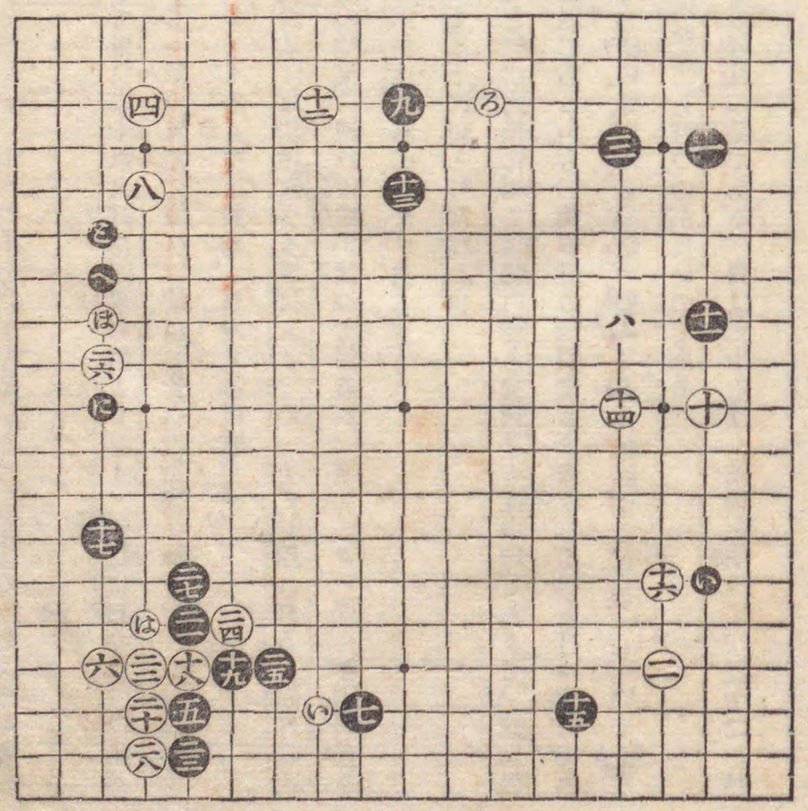
△註　白の手が(ハ)に來れば自然にろの打込の手も出來て右上隅の黒の宏壯は大に削られる。

白十八は普通はと尖む手である、白がはと尖めば黒はにと二間拓するのが最も適應した手で、次で白は此のにの二間拓に對してほと詰め返すか、或は右上に向つて(ハ)の點に冠するかの二途である。

白十八の手てはと運んだ時、次て白がほと詰めれば黒は右側を(ハ)と一間して白からの冠を拒いでおく、若又白がほと詰めず(ハ)と右側を侵して來たならば黒は直ちに長驅して左上白四、八の裾に向つてへ若くはとと突擊するが良い、乃ち此の右上側と左上側との打着點は黒白何れよりするも攻守兩樣の意味に通じて好着點てあり、白が右を守れば黒は左を攻める、若又白が左に備へれば黒は右を守る、之を双方見合の塲所といふのてある。

△註　此の數行の説明は盤面の石を假に白十八をはに尖ませ黒十九をにに二間拓させておいて然る後講義の順序通りに黒白を互に置きかへて翫味すると意味判然する。

白十八は黒にと二間拓をさせぬ策てある、乃ち十八以下二十四迄の手順を履んで、茲に先手を取つて二十六の好點に先鞭を着け得たのは白十八の策の成効したものと見る事が出來る、然し此の結果が敢て黒の不利を來したといふ譯てはない。



(布石法互先局)

△問　前圖白十八以下二十四迄の手を打たず、十八の手を以て左側二十六（△印）の點を占めたならば如何の結果を來すか。

○答　白十八以下の手順を履まずして單に二十六に打たば忽ち黑より（イ）の點に打たれて白は一隅に封鎖される、乃ち白は此の（イ）一手の封鎖を嫌ひ、兼ねて廿六の先鞭を計つたのである。

□再問　本圖十八以下黑二十七に到つても尙且白は封鎖されたる形に非ずや。

○答　本圖の結果も等しく是れ封鎖たるには相違なきも單に（イ）の一手で封鎖されると同日の論てない、且つ十八以下白二十八迄の結果に觀れば味が殘つて居るが、單に（イ）の一手で封鎖されては少しも味が殘らぬから白の不利は極めて多大である。

△問　白二十六△印を更に一歩進めて星下にいと打たば如何。

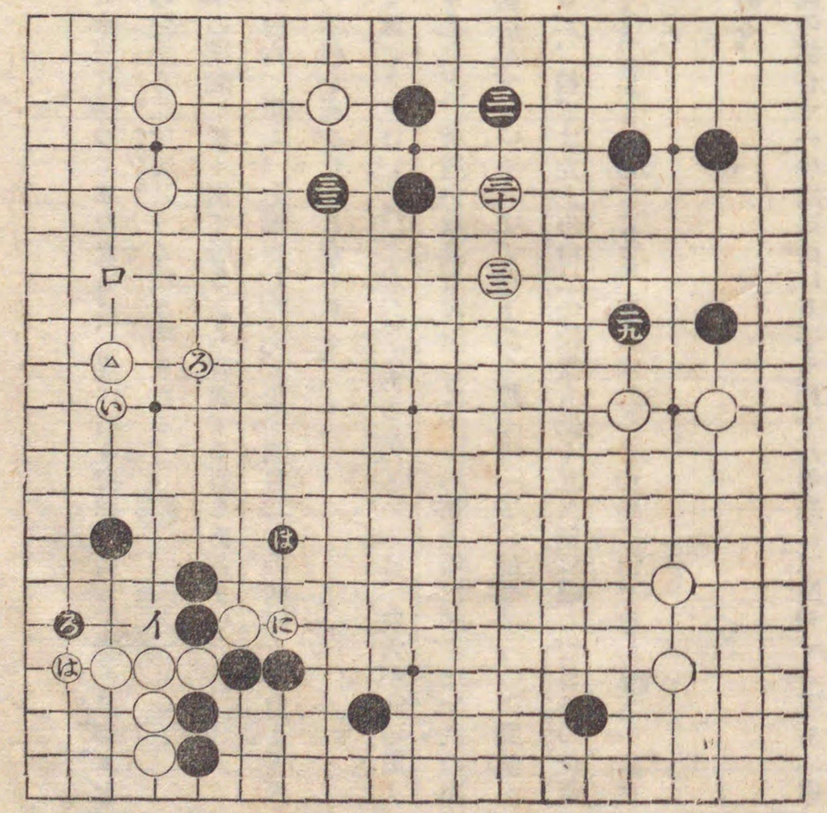
○答　左下隅應接の結果黑は二十七と行び尙後に至て黑ろ白はと交換する樣の理もありて、茲に黑の堅固な壘が築かれるは觀易き道理であるから、此の黑の堅固なるに接近していと打つは百害あるも決して寸毫の利益はない、即ち棋の通則たる『敵の堅固なるに接近す可らず』といふ遠き慮を以つて此く一路控へて二十六（△印）と打つのが良いのである。

黑二十九は右上我地域の大を保持する好良の點である。白は三十と淺く敵地を削つて、三十二と輕く引上げたのである。

黑三十一の應手は、慣用の手である。

黑三十三は白の左上の地を削ると同時に（ロ）の打込を覗ふ手である、のみならず暗に三十、三十二の二子の白にも感じを與へてをるのである。

△註　茲に於て次の白手を想像すると、先づろと左側を飛ぶ位のものであらう、白ろの飛は黑より（ロ）に打込む手を拒ぐと同時に次てにと押さうといふ手を觀てをるのである、隨つて白が三十四の手でろと飛べば、黑はろと左下に向ひ白にはと應じさせておいてほと打つて白の一子を擒にしておく可きであらう。



第貳拾八局

黒五は十二と打ち次て白が六の手て十三に掛つて來たならば、黒は右下白四に對して㋙と高掛りを打つ伏線として先づ白十三を十九の點から二間夾にする樣な手もある。

△註　此の假設の手順は已に從來の講義に屢々出て居るから詳說する要もあるまい。

黒五を此く小目に打つたのは、次の白六、黒七、を豫想した手て左上隅白二との關係上、白より黒七に對する左側方面の詰手に多少の不便を感ぜしむる意てある。

△註　白より左側の詰手に不便を感じるとは、如何いふ意味てあるか、といふに、白六が此の黒より七と夾まれた場合の應手は種々あれど、普通白は黒五に對して十一の點の掛け若くは十八の點の二間飛等の手を用ゐて黒五を壓迫しておいて、次て左上から黒七の一子に迫つて、㋺の點から詰るといふのが常用の手段てあるが、玆ては左上の白二の位置も低く且又側に偏した目外の位置にあるから、此の㋺の詰は、あまり有利てない形になる、黒五は此かる形勢に白を導かうといふ意を含んてをると見るのてある。

白八は此の場合止むを得ざる手てある。

△註　何故なれば前說の通り白が此の場合十一の點に掛ける手も亦十八の點に二間飛する手も（次

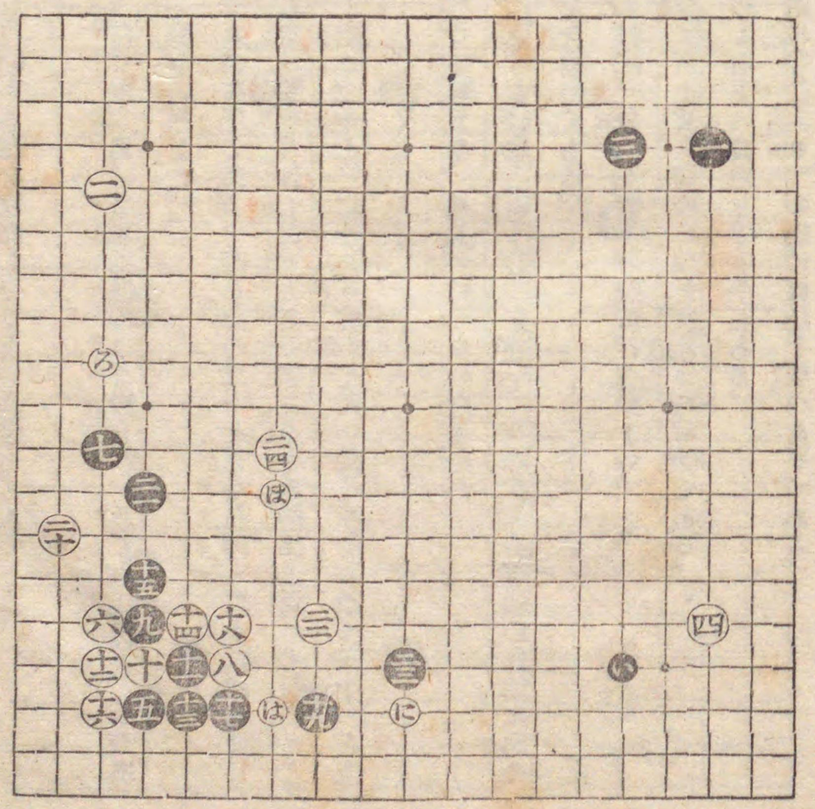
如何ナル意

白大斜ガケ不得止手

て打たうとする㋺の詰があまり有利てないから）打ち難い然りとて黒五を㋩に二間に夾返して見ても、次に黒十一に尖み白㋛に二間拓する姿勢が右下隅の布石と調和せぬ結果になる、其故白は此の場合に適應する手順として大斜掛けの手段に出たのてある。

白八に對する黒九の頂け以下黒二十三迄は普通定石てある。

黒二十四は普通は㋩と打つておく處てあるが此く一路大飛躍したのは左側四子の黒を左上から壓する勢を示す上に多少の高壓力が利いて居る。



（布石法互先局）

攻撃ノ点

白二十四（△印）は若し黒が手抜すれば㋑から黒を攻略しやうといふ意を含んでをる。

此註味アリ

黒二十五は之に備へた手である。

△註　此く運んだ結果局面に於ける黒白双方共別に急ぎ手は殘つて居らぬ、乃て白は現下の最大場たる左上隅に二十六と打つて此の一隅を占領した。

位地ノ高低

黒が二十七と右下隅に掛つたのは是亦大切な所である、若し此の二十七を小目即ち二十八の點に掛つたならば、忽ち白に二十七の點から掛け壓せられて左下方面の黒布石との關係上極めて面白くなる、乃て多少の不利を忍んで高く掛り二十七、二十九と打つておいて先手を取つて三十一と上側の利益を獨占したのである。

好着点

△問　黒三十一は右側星下㋺の邊に打つ手無きや、又其の時の白の應手如何。

○答　右側星下は位地低し、若し打つとすれば㋺と高く打つが佳い、其は次て右下隅の白地に向つて㋩と一バイに詰めやうと云ふ手を含むのである。

黒若し三十一の手を右側へ㋺と着手すれば、白は上側㋺の點に打つがよい。

黒三十三は左上隅白からの拓きを妨げて右上及上側の我地を擴める好着點である。

黒三十五は右側の白地の厚壯を削りつゝ右上の我地を守る手である。

白三十六は右下の白地を手厚くして暗に（イ）（ロ）の邊の打込を覗つた手である。

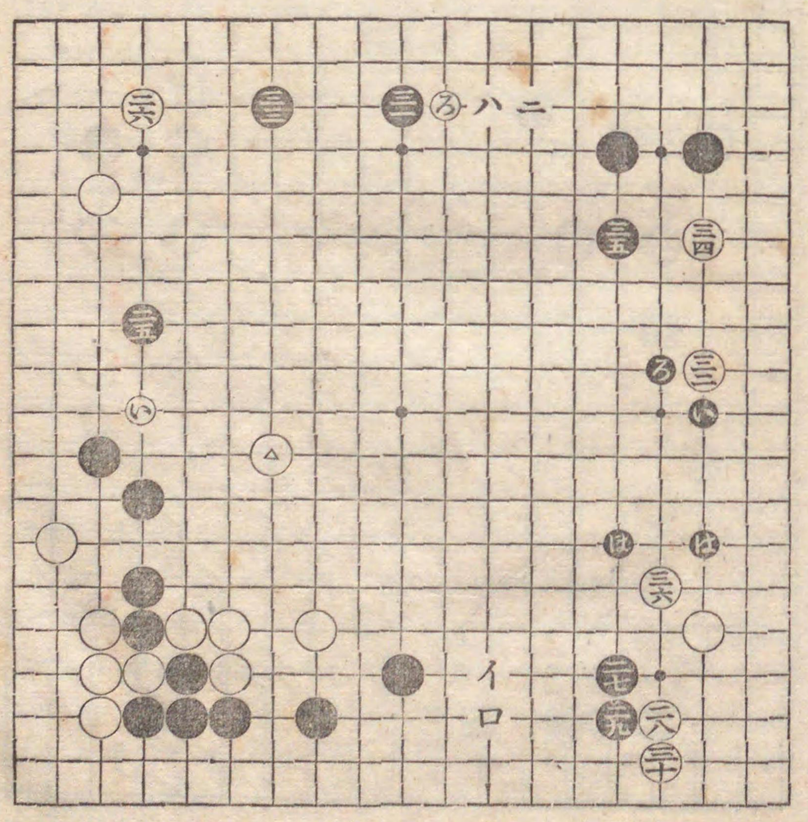
打込ノ注意

△註　白が三十六の尖みを閑却すると黒から㋺の邊に高壓され、爲めに右側の白地が稀薄になるばかりてなく下側（イ）（ロ）邊への白の打込も利かなくなる。

△問　黒に三十三、三十五と打たれた後は上側（ハ）（ニ）の邊へ白から打込む手はなきや。

○答　打込む手のない譯ではなが此く左右共黒の勢力が旺盛て且つ白の聲援のない處は窮屈で、容易に打込めぬ。

△註　打込といふ事には自ら系統がある時機がある、成算なくして重地に入る事は慎まねばならぬ。



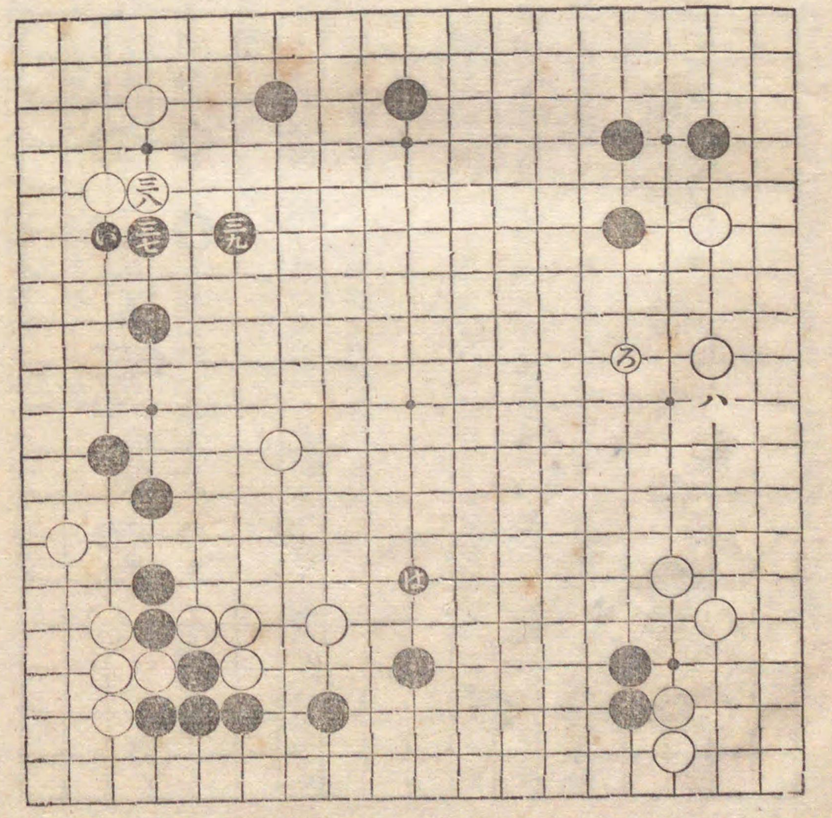
（布石法互先局）

黒三七
白三八
三九
巧妙

黒三十七は白若し手拔すれば直ちにいと押へる手である。白三十八の行びに對して黒三十九の一間飛は輕妙である。此く三十七、三十九と黒の勢力が左上に加はつた以上は白から容易に上側へ打込む事は出來ぬ

△註　黒三十七、三十九は露骨に左上に迫つて暗に上側を守る巧妙な手である、且つ遠く下側黒地に聲援を與へて居る。

次の白手を想像するとろの飛であらう、何となれば若黒より此の點に冠すると忽ち（ハ）へ頂けられる手が出來て大打撃を蒙るからである、白若し四十の手をろと飛ばゞ黒は徐ろにはの邊より兵を進めて、中央四子の白に迫りつゝ下側を防備を計る可きのである。



三間夾の意

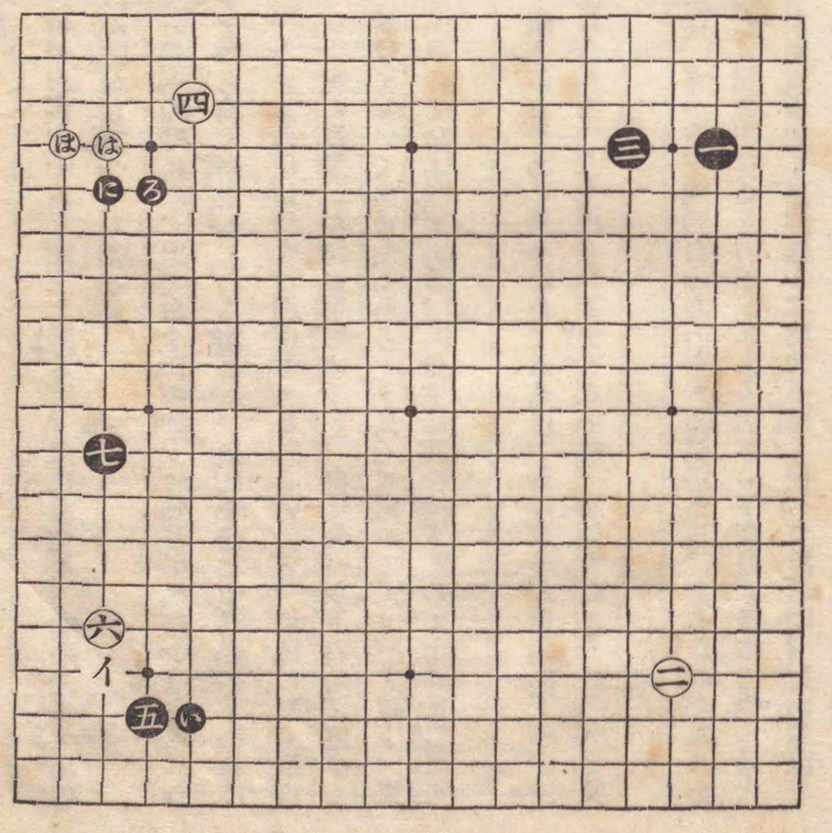
第二十九局

黒五は或はいの點（目外の位置）に打つても差支はない。

「註」然し此の手で左下の左目下即ち（イ）の點に打つたならば如何かといふと、其は考へものである、何故なれば白にいの點に掛かられると右下隅に對して稍同姿勢の類型となる嫌があるからである。

黒七の三間夾はろの高掛を含んだ手である。

「註」白の應手如何により、黒に先手が廻ればろと高く掛り、白はに白はに運ばうといふ策である。



黒十三ヲハト斜走スルト左トニラミ此関係ヲ生ス

黒十三の手は、或はろと斜走してもよい。

黒十三をろと斜走したと假定し、其の際白が尚十四と左上を締らば、黒は右側星下ろの邊に大場の利を占めるか或は右下に向つて(イ)の點から掛つてもよい。

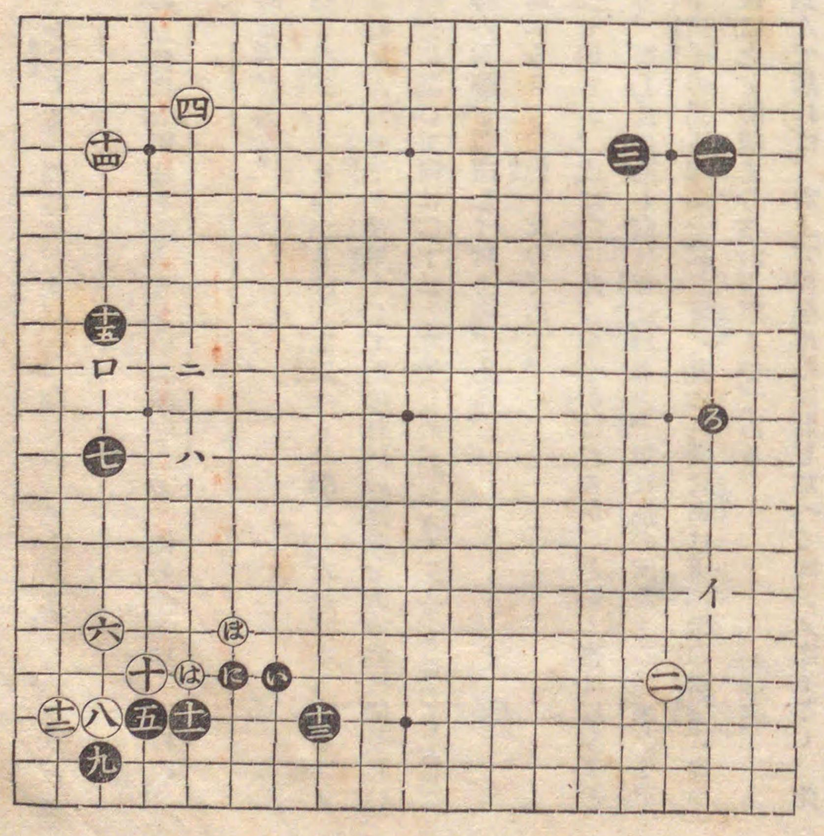
「註」本圖の如く下側へ低く十三と備へた時には、次で白十四の締りに應じて黒は十五と備へねばならぬが、若し此の黒十三の手をろと高く斜走してある場合は、黒は左側を十五と拓くに及ばぬ手拔して右側に着手してもよい、といふのは如何なる理由であるかといふと、本圖の如く黒の十三が低く二間拓である場合は、白十四の後黒が左側を手拔すると、白は先づ左下の黒に迫つてはと壓し、黒に白ほ黒ろと交換を遂げておいて次に左上から——黒七に向つて(ロ)と迫り、黒(ハ)と一間飛した時更に(ニ)と攻られるといふ惧がある、其故黒は其の凌ぎとして十五と二間拓せねばならぬ。

然るに若も黒十三が一路高くろと斜走にしてある樣な場合であれば、茲に述べた白は以下の手段が行はれぬから、隨つて黒七は急に白から(ロ)と迫られる惧もない故、右側方面に先鞭の利を收める事が出來るのである。

尚黒十三の手を此く低く備へたのは、多少右下隅の白の布石とも關係がある、即ち白二が星にある爲め、十三の手でろと高く斜走して裾を明けると右下星にある白から下側星下邊に向つて最大飛躍を試みられる樣な趣もある、が本圖の如く黒が低く二間に手堅く備へて居れば、白から直ち

に此の方面へ廣い拓の手を以つて迫つて見ても一向其の効力がない。

以上黒十三の位置に關する詳論は得失是非の問題ではなく、單に黒の趣向如何による手ではあるが、只此の十三の一着を此く低く備へてある場合は左側に此かる關係を生じるから十五の一着も其の要を見るのである、が此の十三を高くろと斜走にしてあれば、左側は急に何等の變動を見ぬかはり、下側星下方面へ右下隅の白から長驅して迫る樣な意もある、といふ事を心得ておかねばならぬのである。



(布石法互先局)

黑十七ノ意

黑二十一、二十三
生ズ

二十五手目
重大関係ヲ生ズ

白十六は大場である。

黑十七の詰は、白にいと詰めらるゝを妨ぐると同時に、次で右下隅に向つて十九と打ち込まうといふ意を含んで下した手である。

白十八は右上の黑地に迫ると同時に上側に大領域を造らうといふ手である、此の十八は一路控へてろの點に打つのも良い。

黑二十一は機先を制して實利を占める手である。

「註」黑が二十一の手を打たず玆を手拔すると白からはと尖頂けられにと立たねばならぬのは見易き道理で、此くては折角十九と打込んだ一子を手重くして其の打込の効果を大半空に歸せしむる事になる、其故此く二十一と機先を制して白に二十二と應ぜしめ、然る後二十三と地歩を占め、此の白模様を蹂躙して徐ろに局勢の推移を觀望して居るのである。

黑二十五は白より此の點に威壓を加へらるゝを拒いだのである。

「註」二十五の點に此く黑が據つて居るか、或は白に此の點を奪はれるか、といふ事は局面全體の上に非常な關係のある事である、若し此の點を白に奪はれると、單に玆の所右上の黑地が手薄くなるばかりでなく、自然に右下三子の黑も薄弱を感じる、其の反對に白は上側の白模様に向つて黑からする打込を牽制して間接に之を防禦する事が出來るのである。

然るに本圖の如く黑が二十五と飛んで居れば、右上方面黑地の厚壯を加へるは言ふ迄もなく、此

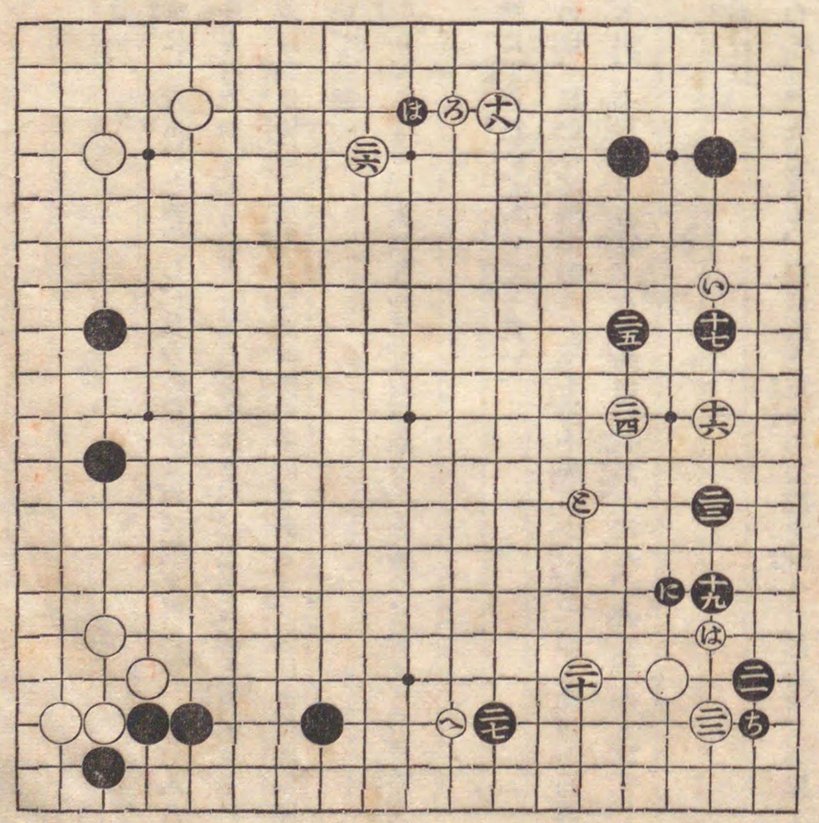
白十八ノ如何

の二十五の一子の爲めに白十六、二十四の二子が勢力微弱であるのは直ちに右下三子の黑の安全を意味し、其と同時に上側白地に向つて黑は何時でもはと打込まうといふ勢力を保留する事が出來る。

白二十六の手で若し下側への邊に備へたならば黑は直ちにはと上側へ打込むが良い。

黑二十七は白よりへの邊に備へられるを拒いで、兼ねて右下の白地を削る手である。

「註」白若二十八の手でとの邊に迫らば黑は二十九の手でちと隅に押す可きである。



大斜
黒十三上ヲ粘キタル例

第三十局

黒七はへに白四を三間夾とするも良い。

「註」黒七の手でへと白を三間夾にしたものと假定し、其の時白は如何に應ず可きか、といふに其は一に白の策戰次第で、必ず此く打たねばならぬと一定した手はない、黒からろと尖頂けられる手の豫防としてはの二間飛、或は斜走掛け、夾返し等如何様の手段もあらう、又は全然此の處を手拔して他に着手する手もないでは無い。

白八はへの點若くは(イ)と星下に拓いてもよい、或は此の手で右下隅をにと締つて居ても敢て差支はない。

黒十三は普通定石に運んで十四の點に下を粘いでおいても良い。

「註」黒が此く上を十三と粘くのは、已に今迄例がある(三子第十局及十一局)即ち此の一局部に就ては黒は多少不利の様であるが、全局から打算すると局面が判易くなる、其で黒の立場としては差支なき手段である。

若し此の十三の手で十四の點を粘げば、

白十三、黒十九、白ほ、黒へ、白と、黒九となり、白はちと三々の要點を抑へ、黒が十三の點を

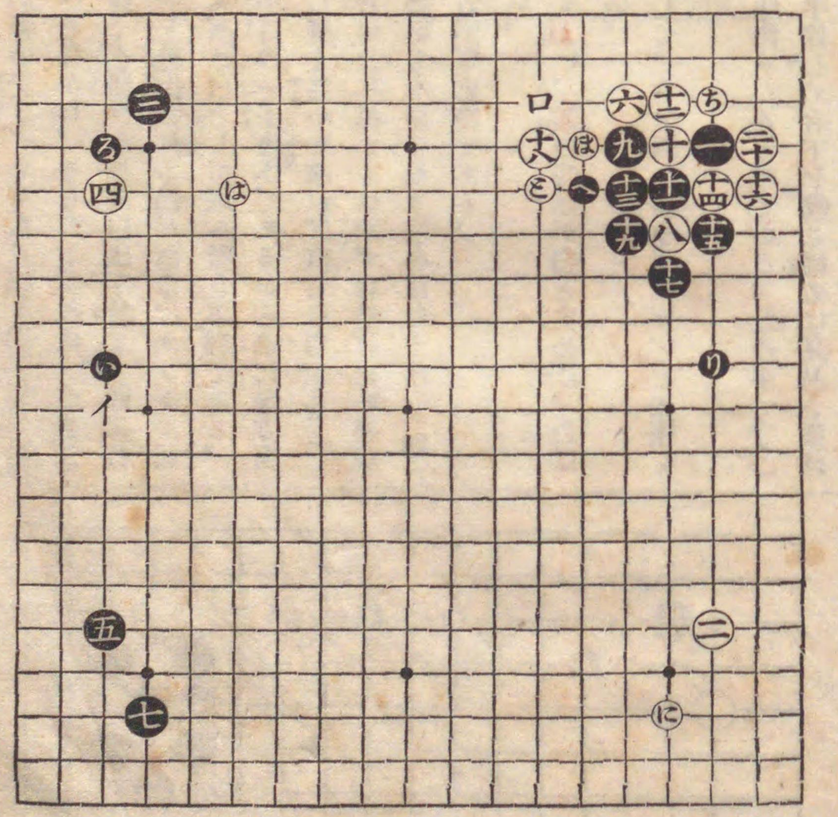
ハト斜走スルトロト一間ニトブトノ利害關係

粘いだ時、白亦十八と粘ぎ、黒はりと三間に備へるのは大斜定石の普通手順である。

白十八は低く(ロ)と一間に飛ぶのもよい。

△問　白十八を此く高く斜走に打つのと、又低く(ロ)と一間に飛ぶのとは何程の利害關係を局面に生ずるや。

○答　此の十八の一着を低く打つか高く打つかといふ事は將來の策戰といふ事よりは現下の場合問題即ち布石關係に鑑みて下す手である。(次頁參考圖參看)



黒二七敵ヲ誘フテ口ニ先鞭ヲ着ケル秘策ナリ

△（參考圖）若し左上黒の布石がへの斜走でもある様な場合は、白十八（△印一子）はいと低く備へて置かねばならぬ、其故は次で黒からろと廣く詰めて來た時に白が高く△印にあれば白は手抜する譯に行かぬ若手抜すれば忽ち黒に（イ）と綽出される惧がある、サリトテ此く狹隘な區域に子數を費すといふ事は白として堪へ難き不利である。

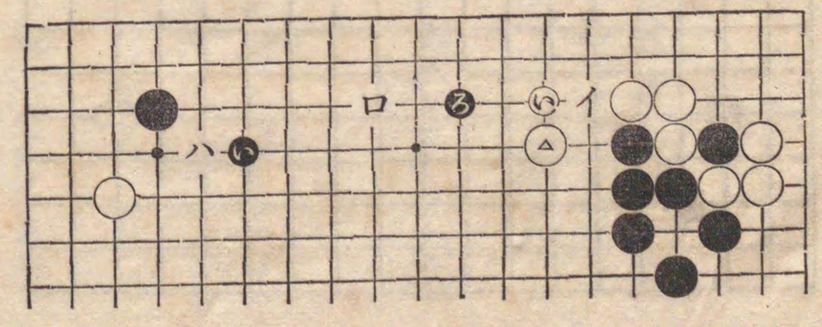
然し本局の如きは左上黒は單に小目の一子のみであるから急にろ方面へ廣く拓いて來る惧はない、若し廣く拓いて來れば直ちに白から（ハ）の點に壓迫されるからである、乃で急に黒からは來ず自然に白の手順が（ロ）方面へ廣く拓き得る棋勢即ち本局の如き場合は白十八（△印）はいと低いよりは此く高くある方が好姿勢である。

黒二十一はいと二間夾にしてもよい。

白二十二はろと二間夾返しにしてもよい、其の時黒がほと尖めば、白はにと上側に地域を劃しておくがよい。

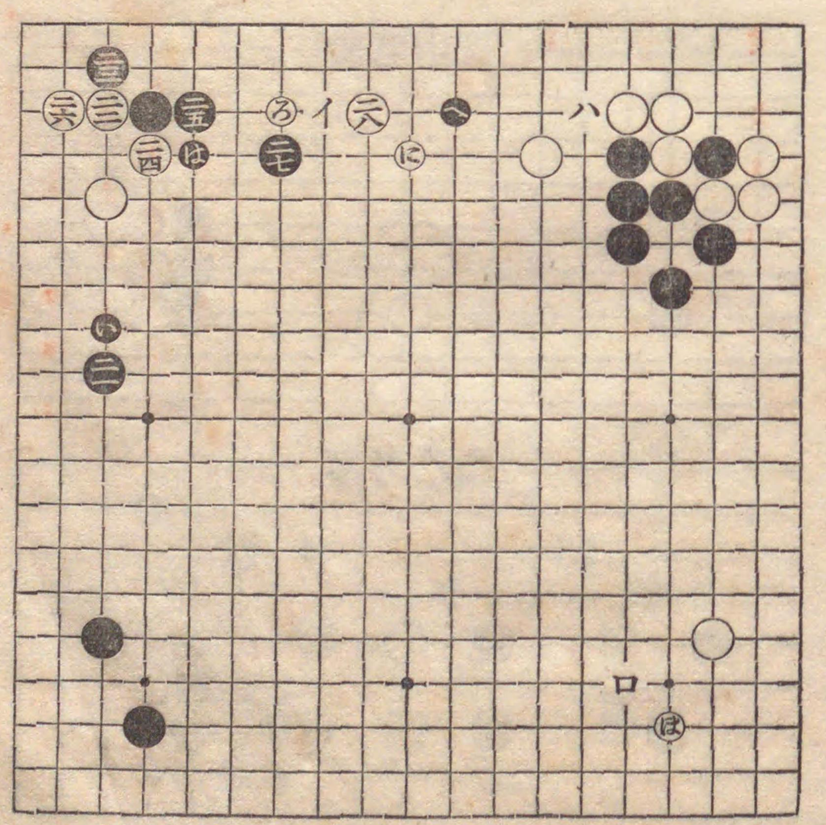
黒二十七は白二十八の一着を誘致して、右下隅に向つて（ロ）と先鞭を着けやうとの策である。

「註」此の黒二十七の秘策は趣味津々なるものである、此の手で（イ）と二間に低く拓いたならば白は手抜して右下をほと締るは見易き道理



である。

然るに此く二十七と高く斜走されては、白二十八は茲を手抜する譯には行かぬ、何故なれば若白が手抜すれば忽ち黒にへと打たれ、黒をして上側に壯大な地域を造らしめるばかりでなく白は黒（ハ）の綽出しに備へるため一着後手を引かねばならぬ、此く重大なる關係のある處であるから白が二十八と上側の好勢を收めるのは至當の事である、即ち黒は上側に好餌を與へて白二十八を誘致し、茲に先手を取つて右下隅に先鞭を着けやうといふ巧妙な策である。



（布石法互先局）

甲圖はノ手ノ時機

乙圖ノ打方味くこ

白三十二ト上ヲ押シタル意

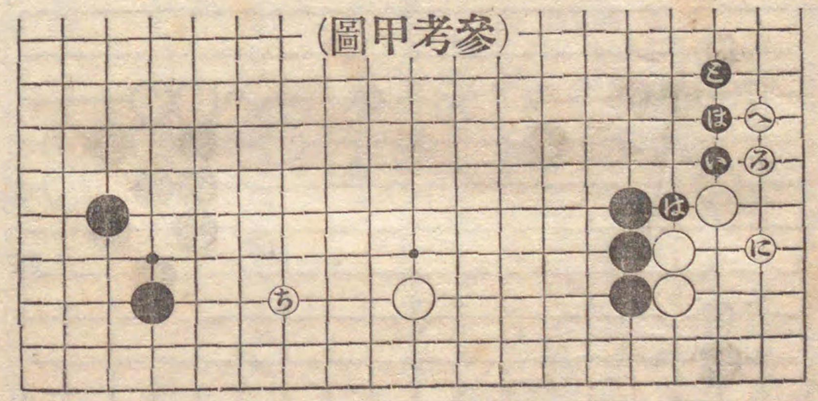
黒三十五ノ手ニテハト頂ケタ手順

黒二十九は目外の白に高壓を加へ、茲に壁を造つて左下の五、七と相待つて下側に壯大なる地域を形造らうと云ふ策である。

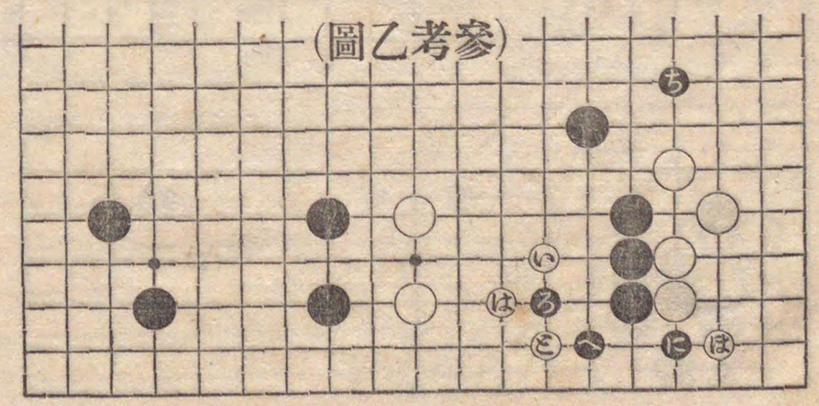
白三十二の手をいと下つたならば、黒は三十三の手を以つて下側星下三十四の點を占める手順である、茲で白が三十二と上へ押したのは、黒に三十三と行びさせて三十四と打込み、以つて下側の黒模様を削らうといふ策である。

黒が三十五の手を以つて白右下目外にあるに對しはと頂けたならば參考甲圖の如き結果

(參考甲圖)



(參考乙圖)



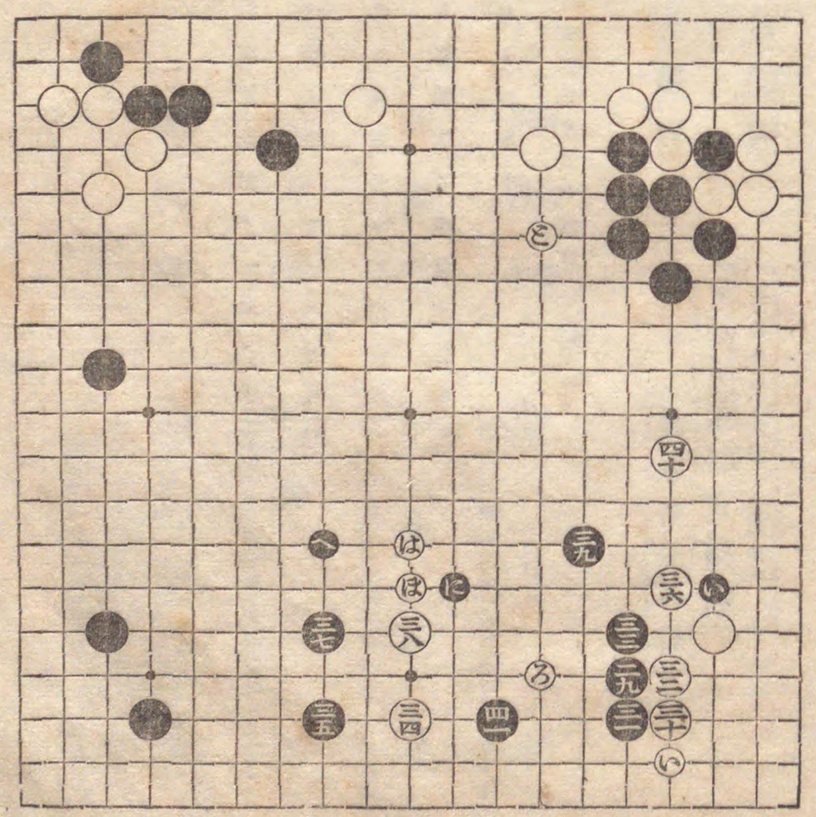
白四十ノ手ニテろト覗タ特

黒四十一ノ手如何

に運ぶものと豫想する事が出來る。

若又白が四十の手でろ(參考乙圖のい)と覗いて來たならば參考乙圖の如き手順に運ぶものと見て大差はない。

本圖黒四十一の後に於て、更に黒白の兩三着を想像すると、白はと飛び、黒にと覗き、白はと粘ぎ、黒がへと飛んで左方を守れば、白は上側よりとと飛んで遙に三十四以下の四子の白を聲援する樣な手順とも考られるのである。



顧みれば、明治四十一年冬、本講義の編輯に從うてより、春風秋雨爰に八星霜、今や互先布石法の部を脱稿するに當り、感懷特に深きものあり

大正四年七月二十五日　（絶軒）

大正五年貳月拾貳日印刷
大正五年貳月拾五日發行

布石法互先局（奥付）
正價金貳圓五拾錢
郵送料金八錢

著作權所有

編輯兼發行者　廣月淩
東京市神田區美土代町四丁目五番地

印刷者　高桑基次
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所　中央圍棋會
東京市神田區美土代町四丁目五番地
（振替貯金口座東京一〇五八九）

大阪五平及民藏庵甘藷
大正十年九月廿日印刷
大正十年九月廿日發行